

生活文化創造都市推進事業

鶴岡地域会議実施報告書

世界に誇る地域資源 “鶴岡シルク” を
生かしたまちづくり



2016年 3月

一般財団法人 日本ファッション協会

はじめに

一般財団法人日本ファッション協会では、地域振興事業として、平成 15（2003）年度より「生活文化創造都市推進事業」に取り組んでいます。

これは、欧米から始まり、今や世界で 100 以上の都市が取り組んでいる 21 世紀型の都市モデル「創造都市=Creative City」をベースに、「豊かな生活文化の創造」を目指す当協会として、地域独自の文化に根差した市民の活発な創造活動こそが豊かな生活文化を育み、産業の振興にもつながるとの認識のもと推進している事業です。

平成 26 年 12 月、山形県鶴岡市は「食文化」分野でユネスコの創造都市ネットワークに加盟認定されました。「食文化」分野での認定は日本で初めてとなります。鶴岡が世界に誇り得る地域資源は、食文化だけではありません。日本で唯一シルク産業の全工程が今でも集積する地域であり、日本の本格的な絹産地の北限でもあります。明治期以降、絹の産地として栄えた鶴岡の養蚕と絹織物の伝統・文化を次世代に伝えていくとともに、絹産業の振興を図るため、鶴岡市では平成 22 年度に「鶴岡シルクタウンプロジェクト」をスタートさせました。

これらの鶴岡市での取り組みをさらに後押しするべく、当協会では、平成 27 年度生活文化創造都市推進事業として、鶴岡市、鶴岡商工会議所と共催で、「世界に誇る地域資源“鶴岡シルク”を生かしたまちづくり」をテーマに、シンポジウム「鶴岡地域会議」を開催いたしました。

本報告書は、平成 27 年 11 月 18 日（水）に、鶴岡市で開催しましたこのシンポジウムの内容をご紹介しますものです。

ぜひご高覧いただき、まちづくりのこれからの取組みのご参考にしていただければ幸いです。

平成 28 年 3 月
一般財団法人 日本ファッション協会

目 次

はじめに	3
目次	5
開催概要	6
出演者プロフィール	7
主催者挨拶	
坪田 秀治 一般財団法人 日本ファッション協会 専務理事	8
開催都市代表挨拶	
山本 益生氏 鶴岡市副市長	10
第一部 基調講演	
「富岡製糸場のこれまでの歩みとまちづくり」 今井 幹夫氏 富岡製糸場名誉顧問 兼 富岡製糸場総合研究センター所長	12
第二部 パネルディスカッション	
「世界をターゲットに、地域資源の生かし方」	21
視察会記録	
鶴岡地域会議視察会開催概要	44
鶴岡まちなかキネマ	46
羽前絹練株式会社	47
アル・ケッチャーノ（昼食）	48
松ヶ岡開墾場	49
致道博物館	50

【開催概要】

開催日時：平成27年11月18日（水）15：00～18：00
会場：マリカ市民ホール（JR鶴岡駅前・庄内産業振興センター西館3階）
主催：一般財団法人 日本ファッション協会
共催：鶴岡市、鶴岡商工会議所
後援：日本商工会議所、山形県商工会議所連合会
テーマ：世界に誇る地域資源“鶴岡シルク”を生かしたまちづくり
参加費：無料
参加人数：150人

【プログラム】

主催者挨拶 一般財団法人 日本ファッション協会 専務理事 坪田 秀治
開催都市代表挨拶
鶴岡市市長 榎本 政規氏 代理 副市長 山本 益生氏

第一部 基調講演「富岡製糸場のこれまでの歩みとまちづくり」
富岡製糸場名誉顧問 兼 富岡製糸場総合研究センター所長
今井 幹夫氏

第二部 パネルディスカッション
「世界をターゲットに、地域資源の生かし方」
◆コーディネーター
三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社
芸術・文化政策センター長 太下 義之氏

◆パネリスト（五十音順）
経済産業省 商務情報政策局生活文化創造産業課課長
（併任）クールジャパン海外戦略室室長
（併任）デザイン政策室室長 （併任）ファッション政策室室長
西垣 淳子氏

鶴岡商工会議所会頭 早坂 剛氏
松ヶ岡開墾場理事長 山田 鉄哉氏
鶴岡シルク株式会社 代表取締役 大和 匡輔氏

◆コメンテーター
同志社大学特別客員教授
文化庁文化芸術創造都市振興室長 佐々木雅幸氏

【出演者プロフィール】

基調講演「富岡製糸場の歴史とまちづくり」



今井幹夫氏
富岡製糸場 名誉顧問 兼
富岡製糸場総合研究センター
所長

群馬大学学芸学部卒業、教職に就いたのち富岡市教育委員会に勤務、その後、額部小学校長として転出し、富岡市立東中学校長、下仁田東中学校長を経て富岡小学校長を最後に定年退職。以後、富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館長を経て、現職となる

パネルディスカッション「世界をターゲットに、地域資源の生かし方」

◆コーディネーター



太下義之氏
三菱 UFJ リサーチ & コンサル
ティング株式会社
芸術・文化政策センター長

文化経済学会<日本>理事、文化政策学会理事、コンテンツ学会理事、政策分析ネットワーク共同副代表。文化審議会文化政策部会委員、東京芸術文化評議会委員、大阪府・大阪市特別参与、沖縄文化活性化・創造発信支援事業（沖縄版アーツカウンシル）評議員、鶴岡市食文化創造都市アドバイザー、新潟市文化スポーツコミッションアドバイザー。文化情報の整備と活用 100 人委員会委員、著作権保護期間の延長問題を考えるフォーラム発起人、など文化政策関連の委員を多数兼務

◆コメンテーター



佐々木 雅幸氏
同志社大学特別客員教授
文化庁文化芸術創造都市
振興室長

金沢大学経済学部助教授等を経て、1992 年金沢大学経済学部教授、ポーランド大学客員研究員。2000 年立命館大学政策科学部教授。2003 年より大阪市立大学大学院創造都市研究科教授。2007 年同大都市研究プラザ所長。2014 年 4 月より現職。著書『創造都市への挑戦：産業と文化の息づく街へ』など

◆パネリスト (五十音順)



西垣淳子氏
経済産業省商務情報政策局
生活文化創造産業課課長
(兼任)クールジャパン海外
戦略室室長
(兼任)デザイン政策室室長
(兼任)ファッション政策室室
長

東京大学法学部卒業。デューク大学法学修士。シカゴ大学法学修士。1991 年 通商産業省入省。1998 年 基礎産業局 生物化学産業課 課長補佐。1999 年 大臣官房 地方課 課長補佐。2001 年 経済産業政策局 産業組織課 課長補佐。2008 年 (独)経済産業研究所 上席研究員。2012 年 貿易経済協力局貿易管理部 安全保障貿易管理課 安全保障貿易国際室長。2014 年 製造産業局ものづくり政策審議室長。2015 年 現職。



早坂 剛氏
鶴岡商工会議所 会頭

株式会社エル・サン 代表取締役社長
慶應義塾大学文学部卒。1971 年エル・サン創立とともに代表取締役就任。2001 年 鶴岡商工会議所会頭就任



山田鉄哉氏
松ヶ岡開墾場理事長



大和匡輔氏
鶴岡シルク株式会社
代表取締役社長

明治薬科大学薬学部卒業。日本チバガイギー(株) (現ノバルティスファーマ) に入社後、(有)芳村捺染での研修を経て東福産業(株)に入社。2002 年同社代表取締役社長に就任 (現職)。2010 年鶴岡シルク「kibiso プロジェクト」の企画・販売等を行う事業会社として鶴岡シルク(株)を設立し、代表取締役社長に就任。鶴岡市総合計画審議会企画専門委員等を務める

主催者挨拶

一般財団法人日本ファッション協会
専務理事 坪田秀治

ただいまご紹介いただきました日本ファッション協会専務理事の坪田秀治と申します。

「こんにちは」というよりも、「おぼんです」という時間になっておりますけれども、このように大変大ぜいの方にお集まりいただき、本当にありがとうございます。

本日は 150 名の方においでいただき、しかもそのうち約 50 名が高校生のみなさんです。鶴岡シルクを素材に製作したドレスを着た皆さんがモデルとなったファッションショー「鶴岡シルクガールズコレクション」を実施された、鶴岡中央高等学校のみなさん 48 名においでいただきました。

この地域会議は、今回で 12 回目になりますが、こんなにたくさんの若い方においでいただいたのは初めてです。画期的なことだと思います。高校生のみなさん、大人がまちづくりにどんなに苦労しているか、今日、聞いていただき、将来、自分たちがどういうまちにしたらいいかを考える、一つのきっかけにさせていただけたら幸いです。

さて、なぜ、日本ファッション協会が、このようなまちづくりの事業をやっているのか、みなさん不思議に思われるかと思います。一般的に“ファッション”というと、アパレルのファッションショーや洋服のことを想像なさるでしょうが、われわれの“ファッション”は、アパレルだけではなく、生活文化、衣食住の枠を超えた生活文化全般の事業を指し、今から 25 年前、当時、東急電鉄の会長だった五島昇さんが、日本商工会議所の会頭のときに創設された団体であります。

当協会の大きな事業の一つとして、「日本クリエイション大賞」という顕彰事業を行っています。25 年前は何が大賞に選ばれたと思いますか？今の高校生の方が、知っているかどうかわかりませんが、“テレフォンカード”でした。生活文化に非常に大きな影響を与えたということで選ばれました。最近ですと、浜松に浜松ホトニクスという会社がありますが、カミオカンデに使われる光電子増倍管をつくって、小柴昌俊教授のノーベル賞受賞に貢献し、さらに 2013 年には CERN の『ヒッグス粒子』発見によるノーベル賞受賞のきっかけとなった会社です。1 年前、この会社が大賞に選ばれました。

もう一つは、シネマ夢倶楽部という国内外のいい映画を表彰する事業も併せてやっています。それと、日本の若者のストリートファッション、東京の 5 地点、原宿、代官山、渋谷、表参道、銀座で毎週若者たちの写真を撮って、ネットを通じて世界に発信しています。これには世界から膨大なアクセスがあります。

もう一つが、今日のまちづくりの振興事業、生活文化創造都市推進事業です。これはカッコいい、ファッションナブルなまちをつくっていくということではなく、地域に根付いた生活文化を土台にしたまちをつくっていくと取り組んでいる事業です。

今、国も地域創生ということで、地域活性化に取り組んでいますが、まちづくりはそう簡単にできるものではありません。けれども、今から準備しておかないと、やっぱり活性化にはつながらないのです。ましてや人口の 7 割以上が 3 大都市に集中して、地域には少子化高齢化のために

働くところもないと、皆さん大変困っておられます。

そこで、自分たちのまちをどういうまちにすべきかということ、真剣に考えるきっかけになればと願い、この事業を行っています。

今日は3時間という長いシンポジウムになりますが、最後までお聞きいただいて、まちづくりの参考にしていただければと思います。よろしくお願いいたします。



開催都市代表挨拶

鶴岡市
市長 榎本 政規氏
代理 副市長 山本 益生氏

鶴岡市長は、本日、急な用で出席できなくなりました。副市長の山本が代わってご挨拶させていただきます。

日本ファッション協会のまちづくりシンポジウム、生活文化創造都市推進事業「鶴岡地域会議」の開催に当たって、開催地を代表して一言ご挨拶申し上げます。

このように多くのみなさまをお迎えし、このような盛大なシンポジウムが開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、この度のシンポジウムにつきましては、主催者であります日本ファッション協会さまからの多大なご支援とご協力により開催されますことを心から感謝申し上げます。

さて、本市は皆さまもご承知のとおり、高級絹織物の産地として高い評価を受けております。これは明治維新後、この地域の発展のために、松ヶ岡において、士族が刀を鋏に持ち替えて桑畑を開拓したことにより、その後、多くの人々がよりよい製品づくりを行ってきたことによるものでございます。これにより、生産量は増加し、産業発展に大きな役割を果たしてきました。また、今日では絹織物の一連の生産工程すべてがそろった全国唯一の都市でもございます。

しかし、現在の絹の産業を取り巻く環境については、大変厳しい状況にあります。特に、絹、カイコを飼うというところは、90%の補てんがないと成立しない産業になっています。このような状況の中では、ここにおられる地域のみなさまから温かいご支援がないとこの産業は成り立ちませんので、強い支援が求められています。このため、本市では産業だけではなく、文化的伝統的価値を併せた形で、振興発展を目指して「鶴岡シルクタウンプロジェクト」を立ち上げ、絹に係る産業、そして蚕を知る体験、今日、いらっしゃっております、鶴岡中央高校のシルクガールズなどを通して啓発事業を行い、活動を総合的に展開しているところです。

本日のシンポジウムには、富岡製糸場の名誉顧問で、富岡製糸場総合研究センター所長であります、今井幹夫様をお迎えしての基調講演があります。ユネスコの世界遺産登録がなりました富岡製糸場の価値・魅力について、そしてまちづくりの視点でのお話が伺えとお聞きしております。ぜひ、よろしくお願いをしたいところです。

歴史を振り返ってみましても、明治7年に、富岡製糸場においてユネスコが世界遺産の絹産業遺産群の一つを構成しております「田島弥平旧宅」で、榊原十兵衛がほか17名をけん引して、養蚕、蚕糸の技術を習得するとともに、蚕室の構造を模して、今なお、5棟の蚕室が現存しております、松ヶ岡の養蚕場を建設しました。また、明治20年の松ヶ岡開墾場における製糸工場創設に際しても、官営富岡製糸場の技術的な指導を受けるなど、これまでも群馬県の絹産業から学ぶといった歴史があります。今回も、時代を超えて三度学ぶこととなります。どうぞよろしくお願いをいたします。

第2部のパネルディスカッションにおきましては、本市のユネスコ創造都市ネットワークの食文化の認定にご尽力を賜りました太下先生、佐々木先生そして経済産業省の商務情報政策局クリ

エイティブ産業課の西垣課長をお招きしての開催となります。皆さま遠方よりご多忙の中、ご参加いただきましたことを改めて御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

この3名のほかに地元で活躍のみなさんを迎えて、パネルディスカッションとなりますが、来場の皆さま方から本市の地域資源であります、シルクの魅力発信、そしてシルクのすばらしさを感じていただけたらと思っております。

どうぞよろしく願いをいたします。最後にこのシンポジウムの主催であります、一般財団法人日本ファッション協会のますますの発展と、今日、ご来場の皆さまのご健勝をご祈念申しあげて、ひと言ご挨拶させていただきます。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。



第一部 基調講演

「富岡製糸場のこれまでの歩みとまちづくり」

富岡製糸場名誉顧問
富岡製糸場総合研究センター所長
今井幹夫氏

ご紹介いただいているとおり、「富岡製糸場と産業遺産群の4資産」は、昨年6月、ユネスコの世界遺産委員会で世界遺産に指定されました。それを追いかけるように、昨年12月、この中の一番重要な部分の3棟が国宝に指定され、ついこの間、世界遺産登録一周年記念事業として「シルクサミット」が群馬県と地元新聞社共催で富岡製糸場を会場に開催されました。

この折のパネラーの一人として、松ヶ岡開墾場理事長の山田さんにわざわざおいでいただきまして、鶴岡市の歴史、養蚕の歴史についてお話をいただきました。今日は、そのお返しということにもなるかと思えますけれども、富岡製糸場の実態をまずお話して、これを富岡市としてまちづくりにどうつなげていくか、こんなことに触れさせていただこうと考えています。

富岡製糸場は、明治5年、1872年に操業を開始しました。明治政府が本当にわずかな期間で模範工場としての富岡製糸場を建設しているのですが、一体その背景はどこにあるのか、これに対して明治政府はどういう覚悟をもってこれに臨んだのか、あるいはその後、どういふ変遷を経て現代に至っているのか、そのあたりを映像でご紹介して、そのあと、まちづくりについてお話させていただきたいと思います。



それでは、最初に映像で富岡製糸場の歴史と文化についてご覧いただき、話を進めていきたいと思えます。

黎明期—富岡製糸場開設まで—

明治政府になる以前、徳川幕府は3つの港を開きました。函館、横浜、長崎です。そのころ、わが国から輸出されていたものの割合を見ますと、安政6年の翌年、つまり万延元年で、既に蚕糸類、すなわち生糸と蚕の卵を含めたものの輸出割合は、全輸出額のなんと50%を超えていました。これが年々右肩上がりに上昇して、慶応元年には9割近い輸出割合になります。単一品目で、これだけの割合で輸出した例はたぶんないと思えます。これが慶応元年を境目にして右肩下がりになってしまいます。そうはいつでも全体の5割はありますから、決して少ないわけではありませんが、傾向としては下がっていきます。

なぜ、こういう傾向になったのかというと、こういう問題が起きていたのです。いい生糸だといって、悪い生糸を混ぜて、輸出してしまう。産業革命を終えたヨーロッパの織物の機械にはかけられないようなものまで輸出してしまっていました。また、蚕の種などについても、こういう問題が起こっていました。蚕の種は菜種によく似ているのです。菜種をお蚕の種紙に貼り付けて輸出してしまうのです。実際にこういうことが、行われていました。それまでの日本の生糸は安全だ、優秀だという評判がこういうことがあって、下がっていった。このような問題が幕末から明治の初めにかけて生まれていました。

こういう状況の中で、明治2年から明治3年にかけて、日本の生糸はあまり質がよくない状態のまま値上がりをしているのです。これに対して、イギリス公使館による実態調査が行われています。2回に分けて養蚕地帯の視察にきています。群馬県、長野県、埼玉県と、細かく歩いています。実はその報告書が、明治2年の調査のときに3冊出されています。2冊が英語、もう1冊はフランス語でした。その翌年、もう一度視察に来ていますが、このときの報告書は2冊で、英語だけでした。

この報告書をまとめる中で、彼らが提言したのが、以下の4点です。一つは、速くヨーロッパの製糸器械を導入しなさいということ。2番目は、そのためには多額の資本を要するが、現状では無理があると指摘しています。この背景には、外国資本の導入ということがあったと考えていますが、明治政府はこれを断っています。3番目は、大工場は1年中操業が可能で、そういうところのためには、繭の確保が必要であると言っています。こういうものを総合して、現在、この条件を満たすのは上州（群馬県）か、信州（長野県）以外はないだろうという提言がなされました。これが明治3年の1月です。

これを受けて、明治政府が決定したのが、模範工場の設立です。これがなんと明治3年の2月なのですね。提言の翌月です。中味を調べてみますと、全く提言と一緒にです。模範工場ですから、日本全体の製糸のレベルアップを果たすためには、外国の指導者から技術を学んで、新技術を学んだ工女が地元に戻って指導者になることが必要としています。

後ほど触れたい資料の中にも出ていますが、山形県からも明治6年、7年、8年にかけて約50名の工女が富岡製糸場に来ています。先ほどの副市長さんのお話によりますと、その他にも群馬県の他の施設に研修に来ているという話もありますから、そういうことによって、この地域の養蚕製糸が発達していったのだろうということは容易に想像できます。ただ、残念ながら私どもが

把握できたのは、山形から派遣された工女の数約 50 名で、その後、山形県内にその工女さん達が戻ったということだけです。これが一体どういう方であったかということは、私どもの立場からは解明できおりません。ぜひそういう解明を、今後していただければ共同研究のようになって調査を深めていけると考えています。

では、その中でなぜ模範工場建設の場が富岡に決まったか。当時富岡は家の数ではせいぜい 600 戸、人口も 2000 人にも満たない小さな町でした。そんな小さな町に、なぜ官営の製糸場を作ったか。その理由は、集約すると以下の 6 点になります。まず、養蚕が盛んで、繭の確保が容易にできること。これは産業革命の一つの原点で、原料の確保ということが第一に上がっていますね。それとよく似ています。しかも、当時、富岡町には外国人に対する攘夷運動がなく、外国人が指導する製糸場をつくってもよろしいという町民の同意書を政府に出しています。そういうある意味画期的なことが行われました。また、広い敷地が手に入る。現在の富岡製糸場の敷地面積は 5 ha を超えています。それがたやすく手に入ったということ。さらに大量の水が確保でき、蒸気エンジン用の石炭が近郊で確保できること、景観が良く風通しも良いこと等々の設立の条件が一番整ったということから、富岡に決まったのです。

ただ一つ、交通が非常に不便であるという問題がありました。この問題は残ります。やがて高崎線が開通する中で、これらは次第に解消されていったわけですが、高崎線の開通は明治 17 年以降ですから、約 10 年以上もそういう不便な中で、富岡製糸場の生糸はフランスのリオンに輸出されていきます。

富岡製糸場の立ち上げのときには、富岡町は街道沿いに家並みがあるだけで、ほかはすべて畑でした。西の方は、前田藩の支藩七日市藩で、この境界に富岡製糸場ができました。この場所は、先ほどお話したように、5 町歩を開拓した場所です。これが特色なのですが、単純化された一本道で、しかも直角に曲がっています。なぜこういう街並みにしたかということは、今日は時間がないので、割愛させていただきます。

政府が雇い入れたフランス人の技術者には、4 人の女性もいました。フランス人の指導者が、日本人の工女に生糸の取り方を教えたわけですが、この中心になったのはブリュナです。つい先だって、富岡市では、ブリュナの生まれたブル・ド・ペアージュ市と友好都市を締結しました。同市はリオンから少し南に下がったところにあります。富岡市の岩井賢太郎市長が同市を訪問したわけですが、その時にブリュナの生家が発見され、そのレプリカの除幕式も行われました。確かにこの人が、ブル・ド・ペアージュ市で生まれたということは間違いありません。

彼は明治 3 年に政府との契約を結んでいます。ブリュナは当時何歳だったかということ、ブル・ド・ペアージュの市役所には、彼の出生届、日本でいう戸籍簿が残ってしまっていて、私も数年前、現地に行って出生録を確認してまいりました。その結果、彼の生年月日は 1840 年 6 月 30 日だったことがわかりました。明治 6 年当時、1873 年には彼は 33 歳ですね。富岡製糸場と深いかかわりがあった明治政府の役人の一人が渋沢栄一ですが、渋沢も同じ年、天保 11 年の生まれです。そういう若い方が、明治政府を動かしていたということも、時代の特徴であるとそんなふうに思われます。

外国人技術者の給料は、ドルに換算して日本円を含めて、ブリュナが 750 円でした。当時の太政大臣とブリュナの給料を比べると、太政大臣三条実美の明治 4 年の月給が 800 円でした。以下、フランスからきた医師マイヤーが 225 円、男子の技術者が 216 円、設計士が 191 円、女性教師が

136 円。これに比べて、日本人の工女はというと、一番腕の立つ一等工女で 1 円 75 銭、二等工女が 1 円 50 銭ですから、こういう比較をすると、べらぼうに安いですね。

ただ、日本人の工女の場合には、宿舍が完備され、三度三度の食事も保障されていました。病気になった場合には、フランス人のお医者さんが治療してくれます。治療費はかかりません。日曜休日制が導入され、夏休み、冬休み、そのほか、お祭の日はお休みでしたから、年間の作業日がおおよそ 280 日でした。そういうふうに見ていくと、いわば技術を学びにきて、その上にお金をもらえるわけですから、そんなには安くはない。当時の大工さんの 1 日の日給が 37 銭で、仮に 30 日で計算すると月給は 11 円になりますが、ただ、大工さんはこれで自分の家族を養い、家計をすべて賄っていました。工女は自分の生活のみですから、工女の給料もそんなに安くはない、そういう見方もできます。

富岡製糸場の建設

いよいよ建物を見ていきますが、富岡製糸場はフランス人の設計士の設計に基づいて作られました。糸を取る繰糸所、繭を保存する繭の倉庫（置繭所）が 2 棟あります。繰糸所の中央部には柱がほとんどありません。最初に建てられたのは繰糸所で、中核となる建物です。次いで倉庫を作っていたと聞いていいかと思います。

東置繭所、西置繭所の完成間近の写真をみると、板を削っている大工さんが、まだちょんまげを結っています。そういう時代に、西洋の近代化の機械を導入したわけです。まさに古いものと新しいものが合体する中で、富岡製糸場は立ち上がっていったと捉えることができると思います。

富岡製糸場の政府側の筆頭だったのは、渋沢栄一でした。もう一人ここにいるのは、はっきりしないのですが、撮影の頃を勘案すると、後に外務大臣になった陸奥宗光だったのではないかと思います。確定はできません。いずれにせよ、政府の役人が視察に訪れています。

フランスから導入された機械は、300 人取りの繰糸機で、実はヨーロッパにおいて養蚕が盛んなフランスやイタリアでさえ、最大の製糸工場でも、糸を取る工女は 150 人まででした。それから見ると、当時の世界最大の繰糸所を富岡に立ち上げたということになります。

明治 8 年ごろの錦絵には、明治 6 年に当時の皇太后が行啓の際におつくりになった歌が書かれています。

フランスからブリュナが特注して輸入した機械の一部は、残念ながら今の富岡にはありません。片倉製糸紡績株式会社と合併後、三代目の片倉脩一（謙太郎）社長が持ち帰って、片倉さんは岡谷市の出身ですから、現在は岡谷市に寄贈されているものもあります。こういう機械がたくさんあり、改良もされました。当初のものは糸をとる口が二口（2 緒）で、糸を巻き取る枠が 2 つ付いていたのですが、それを生産拡大のために 4 つに増やしたものもありました。これらは、民営化され三井家に払い下げられた時代に改良されました。

機械を動かしたのは蒸気エンジンでした。



産業革命というのは、蒸気エンジンの力によって工場を動かすということですが、当時のわが国においては産業革命という言葉はまだ生まれていません。このずっと後ということになるのですが、一つの蒸気エンジンによって先ほど申しあげた 300 人取りの繰糸機が動いていました。

現在の富岡製糸場の建物を空中から撮影すると、糸を取る繰糸所と東西の繭の倉庫が残っているのがわかります。繰糸所の長さは 140m、これと置繭所 2 棟を含めて、この 3 棟が今年の 12 月に国宝に指定されています。明治 5 年にできたものですが、明治以降の建物で国宝に指定されているのは、現在、二つだけです。一つは旧東宮御所、かつての赤坂離宮で、明治 32 年にできたものですが、西洋風の建物で西洋化のいわば表玄関です。かたや製糸工場という違いはあるのですが、明治以降の建物ではこの二つだけが国宝で、その中でも富岡製糸場の価値は非常に高いと思っています。

東置繭所のアーチの上部に、明治 5 年という銘板が埋め込まれています。明治 5 年に操業を始めた、明治 5 年に建ち上がったという両方の意味があります。

東置繭所の長さは 104m あります。特に注目していただきたいのは、礎石とレンガの積み方です。倉庫は現在なら鉄筋コンクリートでつくりますよね。明治 5 年のわが国においては、セメントはありませんでした。したがって寺院等に使われているような礎石を土台にしました。こういう特徴があります。もう一つはレンガの積み方が非常に特徴的で、長いレンガと短いレンガが交互に積まれ、縦の変化があります。これはフランス北部、ベルギーの北部に非常に多く、俗にフランドル地方によく見るものです。したがって、建築の方では、これをフランドル積みと言いますが、こういう文化が富岡製糸場に残っています。

ベルサイユ宮殿はほとんど石でできています。ところが、細部を見ていくと、レンガ積みが見られます。このレンガの積み方は富岡製糸場と全く同じです。ベルサイユ宮殿へ行く途中の塀のレンガの積み方も富岡製糸場と同じです。単に技術者が来たということ、あるいは機械を導入したということ以外に、このようなフランスの文化が生きているのです。だから、日本の文化とフランスの文化が非常にうまく融合しているということが、理解できるかと思います。

富岡市内にある別の倉庫では、レンガの積み方が異なっています。長いレンガは長いレンガだけを積んでいます。その上に短いレンガを積んでいる。この積み方はイギリス型です。日本の場合には、当初フランス積みが入ってきて、やがてイギリス積みが変わっていきます。明治 18 年から 20 年ぐらいに大きな変化があったということが、学会では定説になっています。

東繭倉庫は、1 階は事務所と作業場として使われ、2 階が繭倉庫になっていました。この中に、当時は繭の数量は 1 石 2 石という単位で表していますが、2500 石の繭を貯蔵することができました。東西併せると、5000 石になります。明治 5 年から 26 年までが官営であります。その間の繭の使用量を見ますと、5000 石を超える年はあまりないのです。ですから計画的に倉庫を作ったということが言えると思います。

富岡製糸場の建物の概要

門を入ってすぐ、左方にある建物は、現在、私どもが事務所として使っているものですが、実はこれはフランス人の技術者の宿舎でした。2 階のベランダが非常にきれいです。明治時代の長崎あるいは山口にかけて起きた、わが国の産業革命の中で、これと非常によく似ている建物が 1 棟あります。グラバー邸です。テラスの作りが全く同じですね。この中には、マントルピース

もしつらえられてあります。さらに、浴室がございまして、バスタブも当時のものがそのまま現在も保存されています。機械だけではなくて、生活の部分もそのままの形で保存されている。ここに富岡製糸場の価値の一端を見ることができます。

フランスから4人の女性が来たと言いましたが、その宿舎がありました。これはだいぶ改造されていまして、ベランダだけが当初のものです。

糸を取る工場、繰糸所の長さはなんと140メートルちょっとあります。松ヶ岡開墾場にある旧蚕室に似たけむり出しもあります。非常によく似ていますが、富岡製糸場の場合は、煙ではなくて蒸気抜きです。中に蒸気が充満しますから。機能は違いますけれども、建て方は同じです。繰糸所の内部には柱が一本もありません。これは今でいうトラス構造です。屋根の三角形の力で天井部を支える。作業がしやすいような形に仕上げています。当時は電灯はございません。自然光しかないので。そのために窓を非常にたくさん作った。この窓ガラスも窓枠もすべてフランス製でした。それが現在も残っています。

ただ、中の機械そのものはごく新しいものです。昭和42年以降、日産自動車が開発した自動繰糸機で、機械そのものは新しいものです。古い建物をそのまま使いながら、製糸機械だけは、常に新しいものに変えていった。その歴史が実は富岡製糸場の歴史です。機械はリメイクしても、建物は変化しない。増築しているところもありますが、機械だけは常に新陳代謝を繰り返してきたということが、富岡製糸場の特徴です。

下水道もありました。糸の水は淀み、淀むと悪臭が発生します。当初は単なる掘りをつくって、この水を流そうとしたようですが、計画変更を願い出て暗渠にしています。壁と同じようにレンガづくりです。特に、両側面と底辺にはフランス製のセメントを使っています。こういう重要なところについては、惜しげもなくセメントを使っていたという一つの証拠にもなります。ここに環境に配慮した考え方があったとみてよいかと思えます。

富岡製糸場のリーダーのブリュナの住宅は、片側から見ると、あまり広く見えませんが、反対側から見ると非常に大きいものです。ブリュナは明治4年にフランスに戻っておりますが、そのとき結婚して、奥さんも連れてきていました。建坪はおよそ300坪、この中で二人の生活が始まります。やがて、ここで二人の女の子を産んで、4人で300坪の家に住んでいました。今では考えられないような豪華な生活でありました。もちろんこれは明治政府がつくった建物です。この地下にレンガの地下室、地下蔵、地下倉庫がありました。これをなぜ作ったかという、全く記録に残っていないのですが、たぶん肉類やバターの保存、あるいはワインセラーのようなかたちで活用したと考えられます。こういうものまで、きちんと現在も残っています。

西置繭所は、現在、解体修理中です。倉庫に関しては東西二棟が残っていますが、特に注目していただきたいのは、礎石のレベルです。何年か前に私たちは専門家に測量してもらいました。そうしたところ、ほとんど不動沈下していないことがわかりました。せいぜい2センチくらいです。不動沈下していないということは、この柱は常に垂直であるということで、それくらいしっかりしている。東日本大震災の折にも、このレンガは1枚も崩れておりません。屋根瓦はずれたところが



あります。これを、解体しながら新しく建替えています。基本的には現状維持で、傷んでいるところだけを取り換えることになります。

明治5年に建てられた煙突の一部も、現在まで保存されています。糸を練るのには水が必要で、その水を溜めるための鉄水槽もあります。実はこれだけは日本製です。横須賀製鉄所の部品をつくる横浜製鉄所で、明治8年ごろに造られました。明治41年の全景写真を見ると、石炭を燃料として燃やしていることがよくわかります。

世界遺産への道

平成25年、国が富岡製糸場を世界遺産にしてほしいという推薦書を出しました。長い間生産量が限られていた生糸の大量生産を実現した「技術革新」と、しかも世界と日本との間の技術交流がありました。そのために、絹はかつては一部の特権階級が使用したものであったが、世界の一般の人々もシルクを使えるものにした。その原点が富岡であり、世界遺産にふさわしいという形で推薦しました。

「富岡製糸場と絹産業遺産群」として推薦したわけですが、絹産業遺産群には富岡製糸場以外のもも含まれています。まず富岡製糸場の特色をみると、明治5年に建ったこと、和洋折衷があるということ、民営化後、実は明治26年までは官営でしたが、三井が払い下げを受けまして、さらにそのあと原合名会社に譲渡されました。横浜の三溪園を開いた原富太郎氏が原合名会社という形でこの富岡製糸場を運営し、最後に片倉製糸紡績株式会社に合併されました。こういう歴史があるのですが、その全体を通して、製糸業を世界一の水準に牽引したということがあります。

2番目が、「高山社跡」です。これは藤岡市にあります。養蚕はできるだけ寒いときと暖かい時期をうまく調節することが大切です。寒い時には炭を燃やして暖をとり、暑いときには窓を開けて風を入れる「清温育」という養蚕法を高山長五郎が確立しています。これは自分だけではもったいないということで、私立の学校になります。全国から養蚕に関わる成年男子が集って、新しい養蚕法を国内に広めていった、こういう養蚕の技術革新の跡地があります。

それからもう一つは、荒船風穴です。種の保存が難しく、当時の養蚕は春しかできなかったのです。当時、冷蔵庫はありませんから、これを自然の風穴を利用して冷蔵庫がわりにしました。下仁田町の荒船風穴はわが国最大の保存施設となりました。これは蚕の種の保存の技術革新となりました。

もう一つは、できるだけ風通しをよくした養蚕法「清涼育」を確立した田島弥平が建てた母屋兼蚕室「田島弥平旧宅」です。明治10年以降、ここで作ったお蚕の種がフランスに直輸出されています。そういう歴史を持っています。

この富岡製糸場を含む4つの資産が、世界遺産にふさわしいと推薦しました。この4つの施設の間関連図ですが、富岡製糸場を中心として、製糸場では蚕の種を生産し、蚕の種を荒船風穴に保存し、そして農家に配布して生産拡大を図る。一方高山社も一種の養蚕学校の卒業生のところに、今申し上げたような種を配布して、飼育した繭を富岡製糸場で買いあげるといったように、これら4つの施設は互いに非常に関連が深いものでした。

これを受けて昨年6月、世界遺産委員会にかけられ、その結果、めでたく世界遺産に記載されたということになるのですが、世界遺産委員会の評価を4つの観点からまとめてみました。

4つの施設は生糸の大量生産のために、一貫した優れた見本となる施設であると冒頭に書かれ

ています。特にその中でも富岡製糸場は産業としての養蚕技術、養蚕と訳していますが、本来なら製糸と訳すべきところなのですね。英語、フランス語から訳す時にフランス語の訳が大きいということで、養蚕という言葉になっていますが、要するにその技術を非常に早い時期にわが国に導入したということです。

3番目は設計段階からかなり大規模なものをつくっていったということです。これは日本すなわち極東における産業の方法論を確立したということで、世界的にみても意味があります。4番目は富岡製糸場には徹底的な和洋折衷が生きていることで、この4点を挙げているわけです。

これを追いかけるようにして国宝に指定されました。明治以降の建造物で国宝に指定されているのは先ほど申しあげたように2カ所だけしかありません。その中で、富岡製糸場は明治5年に政府が設立した模範器械製糸場であること、繰糸所および東西の繭倉庫は、木骨煉瓦造による長さ100mを超える雄大な建造物であること、世界の絹文化の発展に大きく貢献したわが国の絹産業の拠点施設であることなどの理由に基づいて、国宝にしたという文化庁の定義があります。

解体復元修理について

富岡製糸場の建築物は非常に丈夫だと言っても、劣化も進んでいるということから、現在、西繭倉庫で、解体修理を進めています。屋根の上に全部覆いをかぶせ、瓦を全部剥いています。組立屋根をスライドさせて、今、屋根が全部丸出しになっています。瓦を1枚1枚全部剥いているのです。本体の上に覆いをかぶせますから、全体的には1.3倍くらいの大きさのスペースが必要になります。さらに1階の床板を剥いています。ここの根太は貧弱なものが使われていました。途中で直しているということもわかりました。そういうものを今後どういうふうに復元していくかが、残されている課題です。

世界遺産富岡製糸場と中核とした富岡市のまちづくり

現在までの富岡製糸場の歴史的な背景、これを受けとめた明治政府の覚悟、そして現在、解体修理に入っていることをお示したわけですが、富岡市においては、この富岡製糸場を中核としたまちづくりが行われています。ただ、残念ながら富岡市にこの建物が寄贈されたのが平成17年以降なのですね。だから、まだわずか10年です。これをまちづくりの中心にした形で、まちづくりが検討されています。

世界遺産になってからと、それ以前との見学者数の変化を見ると、平成25年度が31万人だったのに対し、平成26年度、昨年度は133万人を超える見学者がありました。今年度も10月末の集計で81万人を超え、たぶん昨年同様になるだろうと見ています。ただ、こういうお客さんが単に富岡製糸場だけをご覧になったのでは、まちおこしにならないわけですね。どうまちなかを回遊していただくかということで、例えば街中の商店街が「おせっかいな店」という形で、訪れたお客さんにトイレを貸してくれたり、道案内をしてくれたりということをしています。また、「まちなか案内人制度」というものを立ち上げて、まちなかを回遊するお客さんをご案内しています。そういうかたちが、最近整ってきています。ただ、今、申しあげたとおり、市の所有になってから、まだまだ時間が少ないので、完璧ではありません。

富岡製糸場が世界遺産に指定されているということは、その背景のまちなみそのものもバッファゾーン、緩衝地帯として保存すべきだということですから、まちなみ全体を全部建て替えると

いったことは一切できないわけですね。できるだけ古い形を保ちながらお客さんにいい思いをしていただく。この一点に尽きるわけです。

さらに、富岡製糸場が世界遺産になったということから、養蚕・製糸の再生にも取り組んでいます。富岡市自身もシルクブランド協議会を立ち上げて、富岡市内の養蚕農家が生産した繭でつくった製品を保証し、これを販売していこうではないかという試みをしています。

今日の会場の後ろに鶴岡シルクさんの例がありますように、わたしどももこれからのまちづくりを担うということの中で、場合によっては連携できるということもあろうかと思えます。これをどうやっていったらいいかが今後の課題の一つになろうかと思えます。

いずれにしても、まだまだ取りかかったばかりです。課題が非常に大きいということを申しあげて、ちょうどいただいた時間になりましたので、私の話はおしまいにさせていただきたいと思えます。

ありがとうございました。



第二部 パネルディスカッション

「世界をターゲットに、地域資源の生かし方」



太下 それでは、後半のパネルディスカッションを始めていきたいと思います。今日の会議のテーマは「世界に誇る地域資源 鶴岡シルクを生かしたまちづくり」というものです。これを聞かれてみなさんどう思われましたか？ 高校生のみなさんもたくさんおられますが、鶴岡シルクはもちろんご存知だと思いますが、日本の中では本当に誇らしいすばらしい製品であると思います。でも、“世界に誇る”というのは、ちょっと気負いすぎと思われる方がいらっしゃるのではないのでしょうか。

でも、決してそんなことはないのです。ご案内のとおり、先月10月末まで、イタリアのミラノでミラノ万博が開催されていました。このミラノ万博での日本のパビリオンは非常に評価が高く、金賞を受賞しました。その日本のパビリオンの中で、いちばん人気があったのは、鶴岡のイベントだったと言われています。日本館に何人来たかという統計は出ているのですが、公式には個別のどこの地域のイベントに何人来たかというものは出ていないので、正確な比較はできないのですが、どうやら鶴岡が一番多かったと言われています。

ミラノ万博のテーマは食です。鶴岡のイベントも、精進料理または在来作物によるスローフードなどの食の魅力がテーマだったわけですが、この食と並んで実は多くの来場者を引きつけたのが、鶴岡シルク、キビソだったのですね。みなさんはもしかしたら気づいていなかったかもしれませんが、いつのまにか、鶴岡シルク、キビソは世界レベルに達していたのです。

ということで、今日のタイトル「世界に誇る」は決して大げさなものではないのです。そうい

ったことを含めて、今日はいろいろなご報告をいただきながら、鶴岡シルクをどう生かしていっていいのかというディスカッションを行っていきます。

全体を大きく二つのパートに分けて進めていきたいと思っています。前半では、今日、こちらにお越しいただきました早坂さん、山田さん、大和さんのお三方とも、地元で鶴岡シルクに関連する取り組みをされていますので、最初に鶴岡の地元での取り組みについてご紹介していただきます。

後半は、経済産業省の生活文化創造産業課 課長の西垣さんに、クールジャパンや鶴岡シルクの海外展開に関してより大きな視点でお話を伺い、そういう大きな視点でのお話を踏まえて、パネリストのみなさん、コメンテーターの佐々木先生とともにディスカッションをしていくという流れで進めていきたいと思っています。

では、さっそくでございますけれども、トップバッターとして早坂さんから鶴岡の文化産業を中心にパネルディスカッションを初めていただければと思います。よろしくお願いいたします。

早坂 よろしくお願ひします。今日のテーマであるシルクの件につきましては、お隣に山田さんと大和さんがいらっしゃいますから、細かいことはお二人にお願いすることにいたしまして、私からは鶴岡の産業の特徴と可能性について最初にお話をさせていただきます。

今、どちらの街でも人口減少ということが大きな課題になっているのは、みなさんご承知の通りでございます。鶴岡市も2010年には約137,000人の人口がありましたが、そこから30年後の2040年には7割の約94,000人になると推定されています。日本全体の人口が約7割となるのは2060年といわれておりますが、鶴岡はそれが2040年ということで、鶴岡は急速に人口の減少が進む高齢化先進地域であると言えます。

さらに15歳から64歳までの生産年齢人口が、2040年には5割を切ってしまうといわれており、工業の面、まちの活性化・勢いなどの面において、非常に強い危機感を抱いています。これらをどうやって解決していくのかということが、鶴岡商工会議所の取り組むべき大きな課題であると捉えており、10年間にわたる中期行動計画を策定し、課題解決に向けた取り組みを開始したところです。

鶴岡市は、みなさんご存知のように10年前に1市4町1村が合併してできた市です。これで、14万人くらいの人口規模になったわけですが、それから毎年1万人ぐらいつ減ってきております。合併によって、面積が東北で一番大きい市となり、日本海に面した海、里、山という大きな3つの地勢をもつようになりましたが、これらの地勢と気候は、独特の食文化をつくりあげてきました。今後、これらをどういうふうに生かしていくのかということも、大きな課題だと思っています。

今申し上げた1市4町1村の各旧町村も非常に特徴のある文化、伝統をもつ



ています。旧鶴岡市は酒井家が 250 年間ずっとこのまちを治めてきました。出羽三山の修験場を有し、特徴的な歴史や伝統文化に恵まれた旧羽黒町、黒川能がある旧櫛引町、旧朝日村は山の産地、あつみ温泉のある旧温海町は海の幸にも恵まれており、鶴岡市は観光的にも魅力をもった都市に変わってきていると思います。

私どもの中期行動計画は「鶴岡・庄内の資源、可能性、総合力に基づく産業の振興、地域の活性化」を基本方針とし、「鶴岡シルクのブランド確立と新製品の開発・販路拡大」、「自然・歴史・文化をテーマとした観光の推進」、「地域の優れた製品の販売と観光客の誘致に向けた海外戦略の展開」、「食文化による地域や企業の活性化に向けた戦略の展開」などの重点戦略と重点事業に取り組んでいます。

この計画を推進していくために、会議所の中に新しい5つの委員会をつくっておりますが、この中で今、全日空さん、宅急便のヤマトさんと取り組んでいるのが、東アジア輸出戦略です。沖縄那覇空港が、香港、台湾、シンガポールなどへの物流のハブ空港となっておりますが、香港をターゲットに、那覇空港を使った農産品や加工食品の輸出に取り組んでいます。

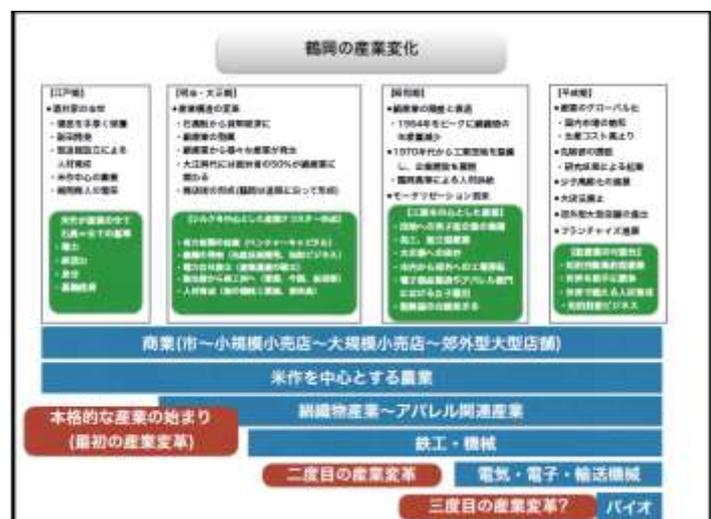
観光においても、デジタル技術と普及が著しいスマートフォンを用いた観光開発の研究が動き出していますが、観光開発においては、地域資源を活用していくことが重要です。「地域の素材」、「地域の労働力」、「地域独自の加工法や技術」といった見える資源に歴史や文化風土等の「見えない資源」を加えて独自の付加価値をつけるということが必要です。また、それらはどこにでもあるというのではなく、「鶴岡でしか手に入らないもの」、「鶴岡らしいもの」、「まがいものではない本物」でなければいけません。まさにそれが鶴岡シルクであり、鶴岡の食文化ではないかと思っています。

また、地域資源を使った文化の継承や産業の発展を促進していくためには、人材の育成が不可欠です。これまで鶴岡の産業の変遷において、人材育成機関が果たした役割は大きく、それが鶴岡の産業の特徴の一つとも言えるかと思っています。

江戸時代からの鶴岡の歴史的な産業の変化をみると、江戸期においては、先ほども申しあげましたが、酒井家の治世のもと新しい田を開墾し、そこで捻出した資金を生かして藩校致道館を設立し、人材育成に取り組んでいました。

明治大正期においては、藩校致道館で学んだ庄内藩の 3000 名の藩士が、刀を鋏に替えて松ヶ岡の開墾に労を尽くし、産業構造を大きく変革しました。それが、鶴岡の絹産業の勃興となりました。

シルク産業が発展していく中で、鶴岡工業高校の前身であります鶴岡町立鶴岡染織学校が設立され、さらに現在の鶴岡中央高校である旧鶴岡家政高校の前身の裁縫学校では、縫製技術の教育が行われておりました。こうしてシルク産業は活況を呈し、最盛期の大正時代には就労者の 5 割近くがシルクに関連した産業に従事していたと言われております。



昭和に入り戦後になると、特にナイロンやレーヨンなどの大量生産が行われ、人造繊維が台頭してから絹織物の生産量は減少していきました。その流れの中で、中央工業団地など大規模な工業団地が整備され、絹織物から電気・電子・輸送機械部品などの工業を中心とした産業構造へと変革を遂げました。この二度目の変革期においては、工業化に伴う実践的な技術者を養成するために設立された鶴岡工業高等専門学校とその卒業生の果たした役割は大きなものがあったと思います。

そして今、人工合成クモ糸繊維の製品化に成功した **Spiber** などのライフサイエンス・バイオテクノロジー技術を駆使した、世界市場を変革しようという新たな産業が生まれつつあり、三度目の大きな変革期を迎えようとしています。

これまで、それぞれの変革期において、必ず人材を育成してきた教育機関というものがありませんでしたが、今も、高等教育・研究機関としての鶴岡高専、山形大学農学部、そして慶應義塾大学先端生命科学研究所や大学院などがあり、これらが産業を支える人材育成の大きな要素になっていると思います。

このことが、これからの人口減少を解決していく大きな糸口になっていくのではないかと私は確信しています。**Spiber** のクモ糸繊維の研究開発は、まさに鶴岡の伝統的産業である絹織物産業に立脚した研究開発に、独自の付加価値を加味したものであり、これから力を高めていくのではないかと考えています。そして、世界に向けて鶴岡の国際的な存在感を高めると同時に、地域の若者の雇用の受け皿となっていくことも期待されます。

最初に申しあげました鶴岡の人口減少には、暗い感じを抱くかもしれませんが、私は今の状況から考えていきますと、けっして暗くはなく、これから明るい未来をつくっていく要素があり、鶴岡は明るい兆し、希望があるまちだと感じているところです。

また、鶴岡はまだまだインフラ整備が遅れておりますので、県道や国道 47 号線・48 号線などの高規格道路、酒田港、庄内空港の整備などが進んでいかなければ、このまちはよくなっていきませんので、鶴岡商工会議所といたしましても、どんどん社会基盤整備に向けた取り組みを進めていこうと思っています。

そして最後になりますが、私も 10 月の 2 日・3 日とミラノ万博の中で鶴岡出展の応援に行ってまいりましたので、その写真をご覧くださいと思います。

世界で一番おいしいと言われる「だだちゃ豆」、1400 年の歴史を持つ「出羽三山の精進料理」を、アルケッチャーノの奥田シェフと羽黒山の斎館の伊藤料理長が出演し、鶴岡の食文化として紹介しました。奥田シェフの「だだちゃ豆とエビのリゾット」、伊藤料理長の「タケノコとごま豆腐」を来場者に提供し好評でした。このほか「庄内米のおにぎり」や「地元の日本酒」、「庄内柿のジュース」、「民田ナス」、「在来野菜の漬物」などを味わっていただき、いずれも大好評を得ました。また鶴岡シルクの「キビソ」、



関川の「しな織」などの工芸品も非常に好評でした。

オープニングのときの奥田シェフによるデモンストレーションでは、おにぎりの食べ方を説明しました。伊藤料理長と奥田シェフが、実際に作った料理を来場者に分けると、みなさん、とても興味を示してくれました。1日4000人、2日間で8000人くらいの来場者があり、しかもみな外国の方ばかりでした。10月4日に新潟のイベントデーを表敬訪問させていただいたのですが、そのときは前列に座っている方たちのほとんどが新潟の方だったので、鶴岡のイベントがいかにか外国の方に受けたか、わかっていただけだと思います。

向こうの方は、さやがついた枝豆の食べ方を知らないと言うので、榎本市長自ら食べ方を教えました。さやを口から出すということがなかなかできないのですね。みなさん興味津々で見ておりました。リゾットやごま豆腐を配ったときは、カウンターのところにはみなさんがたくさん集まって、本当に大好評でした。

びっくりしたのは、「しな織」のデモンストレーションを体験していただいたのですが、日本人と違って遠慮しないのですね。どんどんステージに上がって、指導を受けながら積極的に取り組んでくれました。「しな織」についても木の皮からとった繊維が糸になるということで、大変驚いていました。

「キビソ」についても、大和さんが一生懸命「キビソ」からスカーフやバックなどができるということを説明していました。これも非常にみなさんから喜ばれました。この場では販売が出来なかったのは残念でした。

なぜ1日に4000人も入ったかということ、山伏や巫女さん、ホラ貝のデモンストレーションが大好評だったのです。一緒に写真を撮りたいということで、われわれが着ていた法被を現地の人たちに着せてあげて、ホラ貝を首にかけて撮った記念写真がとても受けました。何かを体験できることが、外国人には大切なのだということがよくわかりました。

このミラノの万博は相当に宣伝になったと思います。ミラノの総領事さんにもお会いできましたし、ユネスコ本部にもまいりました。日本のユネスコ大使にもパリでお会いしましたし、いろいろな方々から喜ばれました。榎本市長は「キビソ」のスカーフを持っていったのですが、渡すとその場で着けてくれました。私はハナブサ醤油さんの「しょうゆの実」を持っていったのですが、大使さんやいろいろな方にお渡ししたところ、それにも興味を示していただきまして、後で、食べていただけたかどうかはわかりませんが、非常に喜んでいただきました。

そんなところがミラノの感想です。

太下 どうもありがとうございました。鶴岡の産業を、文化の歴史から振り返って、現在三度目の変革期にあるということで、大きな歴史的なパースペクティブを提示していただきました。そして鶴岡シルクというのは、鶴岡でしか手に入らない本物なのだということをお話いただきました。また、併せて直近の話題としてミラノ万博における鶴岡の食文化、しな織、キビソの紹介についてもお話いただきました。

それでは続きまして、松ヶ岡開墾場理事長の山田さんに、鶴岡シルクのこれまでの歩みのお話をいただきます。よろしく願いいたします。

山田 松ヶ岡の山田です。にわか勉強をしてきました。とちるところもあるかもしれませんが、うそだということもあるかもしれません。その辺はどうぞご容赦願いたいと思います。

松ヶ岡は 3000 人の侍が開墾した、そういう場所だと言われておりますが、当初開墾するときに、酒田の最上川の両羽橋をわたるところの鶴渡川原という場所がいいか、それとも今の松ヶ岡のところがいいか、庄内藩のお偉いさん方がずいぶん議論されたと言われております。その当時の侍は今みたいに楽をすることを考えないので、「あそこは開墾するのが楽だでやりがいがいい」「松ヶ岡の方が絶えず木を倒して開墾するので、やりがいがある」とされたようです。今の時代からみると、甚だばかな話だということで、あのように鶴岡から割合近い場所で、開墾する場所がよくあったと思いますが、当時は開墾して開けていくというのは、田んぼだけが開けていくということで、村の奥まで田んぼが開発されていったわけですけれども、松ヶ岡は、水利の便が悪く田んぼに向かないと、ずっと取り残されていた場所でありました。大正の終わりから昭和の初めにかけて、水利権を獲得して現在は田んぼもあります。



この 3000 人の侍が開墾したということも甚だ眉唾もので、庄内全域の方々から手伝いを願って、開墾された場所のように思います。庄内全域が心より願って開墾した場所でありました。

今、ここには、63 戸が定住しています。開墾した当初住みついたのは 30 戸くらいであります。そのあと、本家から分家してというような形で現在の 63 戸になっています。開墾して絹とお茶を入れました。その当時の国の、どんどん外貨を稼げという政策の品目がお茶と絹だったので、それをやることによって、幕末に庄内藩は幕府方について、幕府が大政奉還してしまったという、庄内藩にしてみれば梯子を外されたような負け方で、新政府になれば庄内藩はないよというような感じから、汚名をそそがなければなりません。それで国策に協力してやろうと、蚕を始めたわけです。

お茶は京都から種を取り寄せてまいりましたが、やはり気候が合わないせいか、そこそこでやめました。蚕はまずは成功したわけですが、群馬県伊勢崎の島村に庄内から 17 名が選ばれて、蚕の飼い方を習得に行きました。島村の田島弥平さんのところに芳名録がありまして、庄内藩から派遣された榊原十兵衛一行の一人ひとりの直筆で氏名が書かれています。それを見ると、今なら車で 4、5 時間あれば島村まで行かれますが、当時は歩いていったわけですから、感無量というか、感謝しています。

松ヶ岡には、蚕室が今も 5 棟残っていますが、建てたのは 10 棟建てました。8 番蚕室は鶴岡の朝暘学校再建のために移築し、松岡製糸松嶺工場が火災に会い 7 番蚕室を移築、鶴岡市に絹織物工場建設のため 6 番蚕室を移築しました。そんなこんなで今も 5 棟残っています。この蚕室の設計は島村の田島弥平さんの蚕室をまねました。島村の場合は、幅 5 間と長さ 10 間ですが、こちらの方は幅 5 間の長さ 21 間で、本物よりもずいぶん大きく作られていますが、設計は全く同じです。田島弥平さんの蚕室は写真しか残っていませんが、写真を見る限りはそっくりで、先ご

ろオリンピックのロゴマークのパクリというのがずいぶん話題になりましたが、全くパクったものと言えます。パクって140年になりまして、国指定の史跡になりました。

また、経済産業省の方もおられますが、近代化産業遺産に登録されています。これにはお金はついてこないで、経済産業省から近代化産業遺産に認定されたということをなんぼ言ってもいいよというお墨付きをもらったということです。

140何年にもなって、建物も特に瓦は、鶴岡のお城の瓦をそのまま使っているの、考えてみれば200年経ったか、300年経ったかわからないような瓦ではあります。毎年、雪が降ると、その瓦が壊れて、雨漏りするやらで鶴岡市や教育委員会にはいろいろお世話になって修復もやっておりますが、経済産業省はひと言「ごくろうさまです」というだけです。

そんなことで、何も変わっていませんが、蚕を飼うための道具は、熊谷の高木三津五郎夫婦、さとさんとかあちゃんが松ヶ岡に来て、侍に道具をつくることを教えたということもあります。それから、糸取り、生糸をつくる場所は、先ほどお話いただいた今井先生の富岡製糸場で教えていただいて、そんな関係でその当時、富岡の一等工女が鶴岡に派遣されて、その人がずいぶん長く鶴岡に居て、いろいろ教えてくれたそうです。糸取りは、富岡、蚕飼いは島村、両方から教えをいただいて、今日の鶴岡の絹はあります。

特に富岡が世界遺産になったとか国宝になったという先ほどのお話を聞きまして、この辺でもそれを目指して、そういうことをこれから大いに言っていこうそんなふうに思っています。以上です。

太下 ありがとうございます。先ほど、松ヶ岡はパクリだというお話がありましたけれど、けっしてパクリということはないと思っていまして、「本歌取り」という言葉がありますけれども、もともと日本の文化には、先人がつくったものをそのまま取り入れて新しいクリエイションをつくるという文化がありますので、むしろ誇っていただきたいと思えます。

それでは、続きまして大和さんから鶴岡シルクにフォーカスを当てたお話をいただきたいと思えます。先ほど早坂さんがミラノ万博に行かれたというお話がありましたけれど、大和さんもミラノ万博に行かれて鶴岡シルクのPRをされてきました。それでは、大和さんよろしくお願いたします。

大和 大和です、よろしくお願いたします。第一部で、今井先生から世界に知られたシルクのお話をいただき、早坂会頭からは鶴岡の基幹産業であったシルクですが、最盛期には就業者の5割近くがシルクの従事者であったことを伺いました。また、山田さんは毎回毎回違うことを教えてください。私からは鶴岡シルク・キビソがどういう方向に向かって、何を狙っているかということをお話したいと思えます。

庄内藩酒井家は徳川四天王から始まって



おりまして、明治時代になって先ほどからのお話にあるように、3000人が一生懸命蚕をつくってきたのですが、何度もその話をするとまたかと言われそうなので、写真をご覧いただくだけにします。

鶴岡シルクのブランディングをするためにキビソをやっていくわけですが、それでは鶴岡シルクがどういうものであるか、どういう特徴があるのかということその歴史から見ていきたいと思ひます。養蚕から製糸ですが、これには松ヶ岡開墾場があつて、松岡製糸工場ができました。

大事なことは斎藤外市という発明家が生まれたということです。鶴岡では、他の産地と大きく違うところがあります。先ほど、早坂会頭が言われたように、鶴岡工業高校、鶴岡中央高校といった人づくり、ものづくりから、ヒト・モノ・カネ、そういうものが揃つた中で、絹産業は鶴岡の基幹産業になったのだと思ひます。

鶴岡の絹産業の特徴の一つが、日本の本格的な絹産地の北限だということです。鶴岡より北に絹の産地はございません。それから養蚕から製糸、機織、精練、染色、プリント、縫製まですべての工程が揃っているのは、今の日本では鶴岡しかございません。しかも明治維新以降に始まっていますので、日本の産地の中では一番新しい産地です。他のほとんどの産地は和装、着物の産地ですから、200年も300年も続いている歴史がございます。しかしながら、あくまでもその歴史が邪魔をして新しいものを作れない。我々は山田さんのお話のとおり、いろいろな人に教えてもらい、いろいろな人のまねをしながら、実はそこから工夫改良を加えてまいりました。松岡株式会社に残っているようにパリ万博やフィラデルフィア万博に行つて、生糸を出展し大賞を受賞したこともあります。志をもって、世界に打つて出ようという思いをもつて取り組んできたのだと思ひます。鶴岡はシルクロードの東の端にあつて、日本の終着点であります。われわれはここを終着点ではなく折り返し地点であると考え、キビソというものをブランディング化していきたく思ひています。

鶴岡には養蚕、製糸、機織、精練というすべての工程が揃っています。実は広幅を精練するところは、日本に羽前絹練さん1社しかありません。プリント工場には東福産業、芳村捺染があります。縫製は、その従事者が2、3000人はいらっしゃるくらいの集積地であると思ひています。このように一貫生産できるのは、実は鶴岡しかないということ、このことにわれわれは気づいていませんでした。

今や、世界の7割が中国産シルクで、日本は0.1%くらいしか生産していないと言われています。そんななかで、われわれは“kibiso”というプロジェクトを2008年から立ち上げてなんとかしたいと思ひています。

会場の後ろの方にキビソ（生皮芋）を展示しておりますが、触つていただければおわかりになるかと思ひます。キビソはごまごわしてとても糸にできないものです。キビソは、製糸工程で必ず出るものなのですが、これに気付いてくださったのが岡田茂樹さんという元ジュンコ・シマダジャパン株式会社の会長だつた方です。藤沢周平が好きでたまたま鶴岡にいらつしたときに、シルクの家を視察されて、たまたま松岡さんのところにあつたキビソを見



て、おもしろいな、なんとか生かせないかということから始まりました。自分はプロデュースしかできないということで、生地、テキスタイルのデザイナーの須藤玲子さんという日本を代表する方をお願いすることになりました。

須藤さんは、今日はイギリスに行っていらっしゃるかと思いますが、世界中の美術館に彼女のデザインした生地が永久保存されています。あまり聞いたことがないかもしれませんが、テキスタイルをデザインする、生地をデザインする方で、ファッションデザイナーとは違います。しかしながら、テキスタイルデザイナーとしては一番有名な方なのかもしれません。マンダリンオリエンタルホテル東京の内装や銀座のルイ・ヴィトン銀座並木通り店の内装を手掛けています。この須藤さんにキビソを使った布をデザインしていただきました。

鶴岡市の協力を得て、デザイナーズサミットを開催しました。2008年の1回目は、ミントデザインズ、まとふ、シアタープロダクツという若手の、これから伸びるであろうデザイナーさんが来てくれました。2回目の2010年には、ミハイルギネスであったり坂部三樹男であったり、今、第一線で活躍されている方たちが来ています。

実は、キビソのロゴデザインを佐野研二郎氏にお願いしました。今年、東京オリンピックのマークが佐野氏のデザインに決まったときは、やったぞと思ったのですが、あんなことになってしまいました。しかし私は、これは佐野研二郎氏のデザインです。間違いなく佐野研二郎さんですと、言わせていただいています。



「kibiso プロジェクト」に絹織物産業の再生という形で取り組んでいまして、「鶴岡きびそ展」を、これは仕分けで今はなくなりましたが、経済産業省の常設展示場だった表参道のRINという場所で、タダでやらせていただきました。お金がなくても志だけはあるということですので、なんとかいろいろな智恵を出して、いろいろな人たちとやっています。ですので、先ほど経済産業省がお金をくれなかったというお話もありましたが、われわれはいただいています。地域資源活性化支援事業に採択されて、鶴岡市さんからも補助をいただいています。

昨年、当時の小渕経済産業大臣がはじめて山形に来ました、そのときに午前中は佐藤繊維さんで、午後から Spiber さんとキビソの視察に来て下さいました。何か一生懸命やるとどこかで折れてしまうのですが、次から次へといろいろなことをやっています。ニューヨークのスミソニアン博物館に永久保存されましたし、私たちにはお金がありませんが、今日も取材に来ていただいているように取材などは何でも受けるという形で、なるべくメディアに取り上げていただけるようにしています。

しかしながら、ご意見をいただいているいろいろなものをつくりましたけれども、産業を復活させなければいけないということの一番大事なものは出口で、やはり売れなければいけません。2011年3月9日から、そういう出口として最初に新宿伊勢丹で大々的に販売会をやりました。しかし、2日後の東日本大震災で中止になってしまいました、またここでも、何かに崇られているのかな

と思いながら、このときは中止になってしまったのですが、その年の11月10日から銀座の松屋と三越が初めて手を組んで、銀座ファッションウィークをやることになりました。そのときに、松屋さんはキビソでやるということになり、1階の吹き抜けの一番広い場所でキビソの展示会をやっていただきました。その際には知事が来て下さいました。

それからコツコツとやってきまして、去年は東急本店さんであったり、日本橋高島屋さんであったり、日本橋三越本店、京都、横浜、銀座松屋さんとさまざまところで、販売会を行って来ました。その際、その場所にただものを置くと言うことではなくて、私を含め、その場所で必ず説明をし、キビソに触ってもらって、繭を見てもらって、製品を見てもらってという形でやっています。今、日本の絹産業がどういう状況にあるのか、そういうことを話すと、大体皆さん懐かしいとか、昔おじいちゃんが蚕を飼っていたとかおっしゃいます。それはそうです。かつては100万軒の養蚕農家があったのです。それがあつという間になくなってしまいました。そういうことが、実はシルクを復活させる源だと思っています。

JR 東日本の新幹線の座席に置いてある雑誌「トランヴェール」(発行部数65万部)に、取材を受けて特集してもらいました。今日、来ていただいているシルクガールズや鶴岡シルクのことをアピールしました。また、NHKの国際放送が取材してくれ、世界140カ国に放映されています。

去年、日本デザインコミッティにキビソが認定され採択されました。デザインコミッティは丹下健三さんがつくった、建築家やグラフィック、ファッションなどいろいろなデザインに係る方々が参加されている由緒ある会です。そこに、「kibiso・侍絹(侍シルク)」が選ばれました。銀座松屋の7階ギャラリーで「侍絹展」を昨年5月14日から約1ヶ月間、開催させていただきました。この1ヶ月間で2万人ほどの方に来ていただきました。

また、「kibiso」を商標登録し、ブランディング化していますが、それにプラス「侍絹」もブランディング化しています。ほかの産地との差別化をはかるためです。侍が刀を鋏に変えて、桑畑を開墾したことから、他の産地は侍が開墾した歴史はございません。そういう意味でも、さらに「侍(サムライ)」は世界に通用する言葉になっていますので、世界に対してという意味でも、これをブランディング化し、世界を目指したファッションにしようという思いでやっています。

皆さまに見ていただきたくて、いろいろな展示会をやっているうちに、見せるだけではなくいろいろなことが大事なんだと思うようになりました。やれることはすべてわれわれ鶴岡でやりますが、やれないことは教えていただく、これは恥でもなんでもないので、どんどんプラスしていきたいと思っています。

経済産業省に承認いただいて、フランス語でつくったプロモーションビデオがあります。ホラ貝の音から始まるものです。大阪でプレゼンテーションし、承認いただいて、お金をいただいて、プロモーションビデオをフランス語と英語バージョンでつくりました。今回ミラノにもそれを持ってまいりました。

なぜ英語やフランス語でつくるのかということなのですが、とにかく日本人は舶来に弱い。日本でなかなか認知されなくても、やはり海外で認知されてこそということもあって、われわれは最初からフランスの「プルミエール・ヴィジョン」や「メゾン・エ・オブジェ」などで評価されて戻ってきたいと思っています。まだそこまでは実現できていませんけれども、今回ミラノに行かせていただいて、やはり海外でのシルクに対する反応はいいなということを実感しました。早坂会頭からもお話がありましたが、なぜ売ってくれないのかと言われましたし、売っていたらかな

り売れたのではと思います。値段も安い、色もいい。今、ミラノは不況です。ミラノどころか、ヨーロッパはみなそうなのですが、それでもやはりシルクは欲しい。皆さんいいものはいいと言ってくださいました。なんとか日本からヨーロッパに、世界に売り出していきたいと思っています。まだ、道半ばですけれども。

今回、経済産業省のクール・ジャパン・プロジェクトの中で、「The Wonder 500™」というプロジェクトにキビソの製品が選ばれました。3つ選定していただきまして非常に感謝しています。会場の後方にこの3つの商品が展示されています。ストール、傘、バックですが、残念ながら、鶴岡で作っているものはありません。傘は京都、バックは桐生などいろいろなところとコラボしています。原料はすべて鶴岡で



つくっていますが、鶴岡ができないことはほかから教えてもらったり、コラボすることだと思っています。そのかわりお客様に安心安全なトレーサビリティをしっかりとお伝えすべきで、これをしっかりとお伝えして、きちんとキビソマークであり侍シルクマークをつけてやっていきたいと思っています。

ビッグブランドを狙っているわけではなく、地域から発信する地域ブランドとして世界に出していきたい。ですから、鶴岡市と一緒にいろいろな取り組みをしていきますが、それが観光であったり、インバウンドであったり、そういうことの中で、どのくらい鶴岡シルクが土産品として定着するかだと思っています。高校を卒業して大学は東京に行って、鶴岡に帰ってきて、彼女に何かお土産を買っていききたいなというときに、鶴岡シルクを買っていただけたらと思っています。地域ブランドとしても少しずつ認知されるようになっていくと実感しています。

先々週、日本橋三越本店1階の、以前はビッグブランドの展示会を行っていた場所で、大きく「侍絹」の展示販売会を行いました。かつてないくらい売れましたが、買ってくださった方の3分の1が外人の方でした。わらじがあつという間になりました。スウェーデン、イタリア、フランス、シンガポールの方などでした。中国の方は銀座が多く、日本橋にはあまりいらっしゃらないようです。

観光資源の開発の必要性なども言われますけれども、われわれとしては鶴岡市立加茂水族館のネクタイも手掛けていますし、出羽三山神社の御朱印帳もシルクで作っています。慶應大学のネクタイも我々が作っています。いろいろなところとコラボしたり、いろいろな地域からお話をいただいておりますが、われわれはそういう期待を背負いながら、世界に出していくことが先人たちへの恩返しだと思っていますので、歴史を縦、今の時代のものづくりを横糸と思っています。縦糸だけでも横糸だけでも織物は織り上がりません。山田さんに教えていただいた歴史を縦糸、今のものづくりを横糸と思っているのです。

芳村捺染さん、東福産業さんもそうですが、インクジェットではなくて、手捺染にこだわっています。五感で感じられる風合いや色のコク、そういうことがこれからの日本人が求めていくことだと思って、よその人、岡田さんであり、須藤さんでありいろいろな方のご協力を得ながら、

発信していきたいと思っています。

太下 大和さん、ありがとうございます。私も実は「kibiso」のスカーフを使っていますけれども、やはり風合い、肌触りがすごくいいですよ。今日、お集まりのみなさんはよく御存じだと思いますが、鶴岡はシルクにかかわる産業の全工程が今も残っている日本で唯一の都市なのです。こういう何かをひたすら守っている気質というか、土地柄があります。そこに食文化における在来作物に相通じるものがあるような気がします。

さて、ここまで、鶴岡でシルク、そしてその関連産業に携わっている3人の方々のプレゼンテーションを伺いました。ここからは、後半ということで、まずは経済産業省の西垣さんに、もっと大きな国全体の視点から、さらに海外展開の視点からお話をいただければと考えています。

西垣 ただいまご紹介いただきました経済産業省の西垣でございます。今日、資料でご説明するつもりはなく、今、いろいろいただいたお話も踏まえて、私の方からは3点ほど、お話をさせていただきます。

まず、一つ目はミラノ万博に関連して今考えていること、政策として考えていることです。2番目は産業遺産でございますが、今日も富岡製糸場のお話でございますけれども、地域の観光資源として近代化産業遺産を活用していけないかといったことについても、少し最近の動きをご説明できるかと思えます。

3点目は最後にお話がありましたが、まさにデザイナーとのコラボについてのお話です。売れるものをつくるという意味で、デザイナーと産地がコラボしていく、そういったことについてわれわれの行っていることとお話したいと思えます。あるいは先ほど、産地同士が連携したというお話もありましたけれども、ものづくりの世界も、ものすごく今、変わってきています。そういったものづくりの世界における地域のノウハウを含めて、われわれが今、支援しようとしていることをご紹介できればと思えます。

まず、ミラノ万博のお話を聞いて思いましたのは、日本館は金賞を取りましたし、非常に評判が良かったと思えますけれども、その背景にご紹介したいものに、ジェトロがいくつかの企業と一っしょになってつくった「日本館アプリ」があります。これは日本館で見られる地方産品を含めた日本のものについて、その背景から説明をしたものです。今回、特に食でございましたけれども、大豆や豆と言われても、一体何に使っているのか、外国の方にはわからない。そこでこういう料理に使われていますとか、どういう原料をどういうふうにご飯に結び付けているのかということについて、日本語と英語とイタリア語、この3カ国語で発信していたのです。これに実はフォロワーが12万人も居て、しかも9割が欧州人、そのほとんどがイタリア人でした。現地で日本館を訪れる方々に大変よく使われました。

なぜ、この話をしたかという、日本からいいものを持って海外に行きます、例えば海外に行って、私たちのものは絶対に売れますと、ぜひ補助してくださいという話がわれわれのところによく来るのです。ただ、いいものも本当にいいということが相手に伝わらない限り、いいものではなくて、いかに相手に日本のものの良さを伝えるか、そこがとても重要な点ではないかということミラノ万博は教えてくれたのかなと思っています。

それともう一つ、ミラノ万博にいろいろ地方から出展されて評判がよかったというお話がござ

います。それを単発で終わらせてはいけないということも思っています。よく聞きますのは、例えば、外国の展示会で必死になって県の産品などのプロモーションをやっても、それは1週間、2週間で終わってしまっていて続かないので、日本の特産品を海外に出していったときに、それを長く続かせるための仕組みが重要だと思っています。

2年前、平成25年に、私たちのところにクールジャパン推進機構ができましたけれども、その機構で出資をしている案件は、大きくプラットフォームをつくって進めています。

最近の話でご紹介したいのは、11月12日に機構の方から発表しましたが、パリの「SAS ENIS（サス エニス）」という店に1億円の出資を決めました。これは何かというと、もともと事業者さんがパリのオペラ座の前の一等地に日本の産品を売る店、セレクトショップのようなものを作っていらして、日本の会社がフランス展開をするための卸のお手伝いをし、さらに海外に展示会で来た際の連絡先をコーディネートするといった事業を展開してこられました。その方のお店をさらに拡充し、近くに既に2店舗目も開いていらっしゃるのですけれども、こういったところを利用すれば、一度フランスに出て行った方々が、その後も継続してビジネスができるお手伝いになるのではないかとということで、事業者側と非常にうまく話が進んで、ここの出資を決めました。

これを発表してから、いろいろな方々から問い合わせがあります。自分たちの商品をそこに並べてもらえないかという話や、海外展開のアイデアを実施する際のコンサルティングをしてくれないかという話もきます。お店自体がそんなに大きくないこともあって、クールジャパン機構の方でも、そういった話を聞いて、うまくお手伝いにつなげていくことを考えています。

実は今日、朝早く鶴岡に来て、Spiberさんや東福さん、松岡さんなどいくつか鶴岡のみなさんの会社を見せていただいたのですけれども、本当にいいものを持っていらっしゃるのです、それをうまく繋いでいける仕組みにできたらと思っています。

もしネットにつながったら、クールジャパン推進機構、CJ機構で出ると思うのでご覧いただきたいのですが、既に投資した案件が83件あって、いくつかご紹介したい中に、「ジャパンモール」という、海外にデパートのようなものを作ってしまうというものがあります。今、マレーシアと中国の2カ所で進めています。マレーシアは来年の春ぐらいにはできると思います。ここも皆さんが出ていく上でのプラットフォームになるかと思います。中国の方は、2018年に寧波市に本当に日本のいいものを置けるような全館日本のものを扱う、そういうものをつくっています。

先ほど、NHKの国際放送ぐらいしか発信するところがないというお話もあったと思いますが、これも実はスカパーの海外向けの放送チャンネル「ワクワクジャパン」に、総事業費110億うちの4割を出資しました。これは日本の放送コンテンツを配信するチャンネルで、人気のある番組やアセアンで人気のある日本のラーメン、ジャパンアニメ、スポーツ番組などを流しているのですが、その間に各地の観光情報を流すといったことも進めています。今の時点ではインドネシア、ミャンマー、シンガポールの3カ国に流していて、2020年度には世界22カ国、視聴可能世帯数4100万世帯といったところを目指して既に動いていますので、ぜひ使っていただければと思っています。

また、クールジャパン機構のお話で、地域産品の販売をまさに進めていきたいと思いますというおもしろい取り組みがあります。長崎県の日本茶、今は日本茶ブームですから、アメリカに日本茶カフェをつくりましょうという話を進めています。具体的には1号店が来年の春、ロサンゼルスに

開店するのですけれども、お茶を出すだけではつまらない、せつかくであれば長崎県のお茶をお出しするだけでなく、九州のいろいろなものを出しましょうということで、九州の陶磁器を使うカフェにして、さらにそこに文明堂のカステラ巻など九州の名産品をつけて、地域のかたまりでアメリカに出ていく事業を支援するという話がございます。

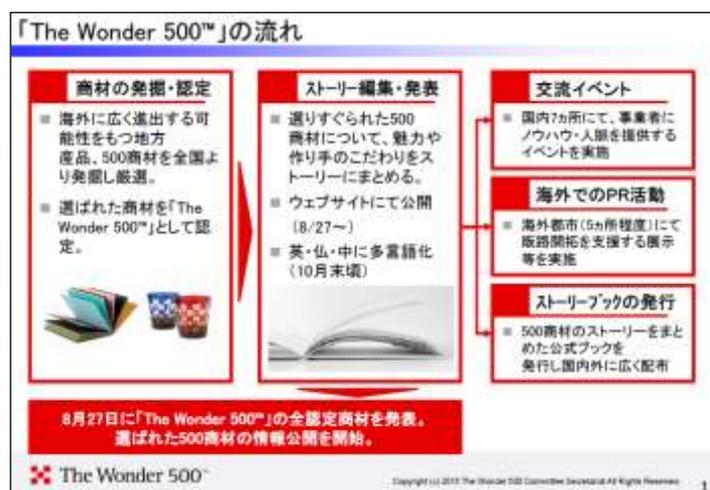
クールジャパン機構の出資というと、非常に大きなものではないかとみなさんから恐れられているところもあるのですけれども、実は出資規模は1億円のものから150億円規模のものまでさまざまです。唯一クールジャパンを使うのは難しいと言われている理由に、事業主体をきちんとつくらなければいけないということがあります。既存の事業者さんでいいのですけれども自分で事業をやり、採算性が取れるビジネスプランをつくっていただいた方々に投資しています。本気で海外に進出するといったことを考えていらっしゃる方は、ぜひこういったことも考えていただければと思います。

そこまで自分で事業をやるということではなく、自分たちのものを売るような場を求めているという方は、先ほど申しあげたようなプラットフォームをご利用いただけたらと思います。

その関連で、先ほどもお話に出た「The Wonder 500™」の最新のお話をさせていただこうと思います。先ほど大和さんがおっしゃっていたものですが、これは何かというと、これまで経産省の政策はややもすると、産業界側の目線に立って、産業界の売りたいものを支援する政策になりがちでしたが、われわれクリエイティブ産業課は欲しい人、買いたい人、消費者の方が欲しいものを選びましょうという観点から商材を選びました。プロデューサー30人を集めて、500商材を選んでもらいました。各地にあるいいものを選んでもらって、その中から、これは将来売れるというものを選んでいきます。しかも、そこで選ばれた500商材についてこれはいいものですよというだけでは意味がないので、なぜそれを選んだのか、先ほどのミラノ万博のアプリではないのですけれども、なぜそれが優れているのかというストーリーを事業者さんといっしょにつくって、英・仏・中・日の4言語化してサイトに掲載しております。ストーリーブックと書いてありますが、まさにそのものを商品化しているバックにあるストーリー、こういったものと一緒に、日本のいいものとして宣伝していく、こういった事業を展開しています。

先ほどのお話にぴったりで、まさにストーリーが裏にあるわけです。そういうものを一緒に日本のいいものとしてプロモーションしていければということで、取り組んでいます。

もう一つは、ネット上に「NIPPON QUEST」というプラットフォームを開きまして、ここにはわれわれが選んだものではなく、自分のところで、地方名物、ふるさと名物、われこそはふるさと名物だというものをどんどんそれに掲載してください、われわれはそこに乗せていいかどうかは決めません、乗りたい人は乗ってくださいとやった上で、このページを見に来た人が、ポイントをつけるというサイトを開いています。これも先ほど申しあげたように、消費者視点で、こ



のウェブページを見に来た人の視点でポイントを付けて、ポイントの高い人を月ごとにノミネートし、上位3者を発表する仕組みをとっています。来年3月には、今までの投票結果をもとに、誰が一番人気投票されたかを見て、フェイスブックに「いいね」をたくさんもらった人を表彰しようとしています。

まだまだ掲載する時間はありますので、もし鶴岡市のみなさんで、うちのシルクが、うちの食材がということで、今からでも参戦していただければと思っております。

投票者の属性を見ていただくと、外国人が15%で、実は外国人の得点はちょっと高くしてあります。これも、世界への発信の場としてご用意しているものです。

2点目ですが、私たちの仲間である関東経済産業局が「絹の道プロジェクト」を進めています。これは何かというと、富岡製糸場が世界から観光客を集めているのであれば、富岡製糸場だけを見て帰るのはもったいないので、鶴岡シルクにも入っていただいています。シルクの道にゆかりがあるところ、ここをどんどん回っていただいて広域にして、外国の方が東京に来て、東京と大阪だけを見て帰るのではなく、富岡製糸場に来たら、富岡だけを見て帰るのではなく、広域を見て、ストーリーを感じ、一緒になって体験して帰ってもらおうというプロジェクトです。こうした動きは、インバウンドを進めていこうという政府の取り組みの流れの中で、どんどんこれから取り組んでいただこうと思っているものですが、現地サーベイをやったところで「観光ビジョン構想会議」が関係閣僚で設立され、第1回会議が開かれました。ここで、2020年までに2000万人の訪日観光客と言っていたのが、今年中にも成立するかという中で、さらにインバウンドを拡大していこう、それによってGDPを押し上げていこうと、海外の方を日本に呼び込んでいくために、地域の資源を磨きあげ、観光資源としてブランディングするといったことを推進しようと、今、いろいろと政策検討させていただいています。

先ほど、私ども経済産業省はお金をくれないというお話もありましたが、我々の中には中小企業庁という割とお金を持っているところがあって、例えば、「ふるさと名物支援事業」や「ジャパンブランド育成支援事業」などいくつか既存の予算があるもの、支援をしていくようなものもございます。地域の資源を磨きあげていいものをつくり、それをタネにして海外からお客様に来ていただく、さらに1日2日の短い訪問ではなく、しかもそれが東京、大阪だけではなく、地方に行っていただく、そのためには、空港などの交通インフラや、Wi-Fiが使えない、通訳がいるかないか、サインがない、そういったこともどうするのかなど、インフラ整備が非常に重要だとは思いますが、それも進めつつ、さはさりながら来てもらうためには、呼び込むものが必要ですので、地方資源の観光資源としての磨きあげということこれから一緒に考え、進めていきたいと考えています。

最後は、私も今回産地に来させていただいて、シルクのすべての工程が産地にあるというのは素晴らしいなと思って話を聞かせていただきました。ただ、やはり売れるものを作るというこ



とが本当に大事だと思っていて、クリエイティブ産業課の政策には、デザイナーと産地がコラボしていいものをつくる「MORE THAN プロジェクト」という、プロデュース事業を支援する仕組みもあります。やはりどうすれば売れるかという発想を、事業者さんと一緒につくって発信することが重要だと思っております、こういうデザイナーさんともものづくりの人たちとをつなぐ仕組みを支援しています。

また、「IoT 推進コンソーシアム」というものを総務省と一緒に立ち上げたところです。IoT 推進ラボを経済産業省が担当しているのですが、先進的なモデル事業、IoT を活用した新たな事業をビジネスモデルとして進めていく事業です。こういう人たちをどんどん支援していこうということを、重要な政策として立ち上げたところです。

その中で、セーレンさんのビジネスモデル事例は非常にいいとわれわれは考えています。消費者のニーズ、要はつくってから売りに出すのではなく、消費者が何を欲しがっているかということを受けてからテーラーメイドで生産していくというもので、どんどん技術的なレベルが上がれば、消費者はこちらに向かうと思います。それを繊維産業の世界で続けられているのがセーレンさんの事例です。生産者側が売りたいものを市場に大量に送っていったら、どんどん在庫が増えていくだけですから、むしろ消費者が欲しいものを送り出していき、そういうことにこれから世の中が流れていくという状況の説明として挙げています。

最後に「TPP」についても触れたいと思います。こちらで TPP というとならば農業の話になるかもしれませんが、今日は繊維産業についてご紹介します。先ほどアメリカへも輸出していらっしゃるというお話がありましたが、今回繊維について、関税をすべて撤廃することで合意しました。むしろこういった状況も踏まえて、うまく輸出促進につなげていただけたらと思っています。長くなってしまいましたが、私の方からはこれで終わりにします。ありがとうございました。

太下 西垣さんありがとうございました。今のお話を踏まえて、みなさんからコメントをいただきたいです。ぜひ前段でご講演いただいた今井先生にもご発言いただいて、それらを踏まえて総括的なコメントを佐々木先生にいただく流れにしたいと思います。

個人的には西垣さんのおっしゃった、特に今、経済産業省さんが取り組まれている施策について、利用者側の視点を強調されているところ、そのために政府が参加して進められているということは大変参考になりました。セーレンさんの事例も究極のジャストインタイムですね。だんだん、日本の産業も、新しい次元に進んでいるのだなと感じました。

それでは早坂さんからコメントをいただいてもよろしいでしょうか。

早坂 鶴岡シルクはこれから伸ばせる産業だと思っております。9月の末に松岡さんが火事に

IoT・ビッグデータ・AIを活用したビジネスモデル事例

セーレン

消費者のニーズの迅速な生産プロセスへの反映

総合繊維業のセーレンは、パソコンで作ったデザインデータで、タイムラグなしに布地をプリントし、染めて最終製品にする独自のシステム「ビスコテックス」を開発。顧客が、店頭で様々な選択肢の中から自分好みの生地やデザインの組み合わせ（47万通り）を選ばせ、データが即座に工場に送られ、自動的に生産を開始。顧客の好みに合わせた世界で1着のパーソナルオーダーを3週間で生産・納品。

本事例から想定される将来像

- ✓ 個人のニーズに合わせたテーラーメイド製品が量産品と変わらない価格で提供できるように。
- ✓ 将来的には、同様に、多品種少量、短納期、在庫レスを実現するマスカスタマイゼーションの仕組みが他分野の製造プロセスに適用され、製造業全体に波及。

なりましたね。あれで絹の生産をやめるのかと思って心配になり、また、どこが焼けたのかわからないものですから市役所に電話をかけて、松岡さんとミラノから帰ったらお会いしたいとお願いし、先日、氏家社長にお会いしました。そうしたら、引き続きやっていくという力強いお話を承ったものですから安心していきます。

実は、普段から蚕、糸をつくる、その一番元になる桑園をこれから鶴岡の周辺につくったらどうかということを提案しております。山田さんの松ヶ岡が本当はいいのではないかとと思うのですが、桑はある程度平地でないとつukれないということなので、今日、役所のみなさんもいらっしゃっていると思いますが、ぜひ鶴岡の原点である桑園をつくっていただければと思っております。

それからもう一つ、鶴岡商工会議所が市内の事業所 32 社から出資をいただいて、完全なる民間で、まちづくり会社「株式会社まちづくり鶴岡」をもう 10 年くらいになるでしょうか、設立しました。この会社が現在、「鶴岡まちなかキネマ」という映画館を運営しています。これは松文産業さんの木造絹織物工場を、それこそ真ん中に柱がないトラス状の工場を映画館としてリノベーションしたのですが非常にいいものです。

今年、鶴岡の商工会議所でも、会員の人たちが、「まず絹のことを知らないでは困るよね」ということで、本当は桑畑や蚕のところから一貫生産するところまで全部を見ることができればいいのですが、そういう場所はないわけで、大和さんのところに相談しまして、それを見せる昔つくった映画を「鶴岡まちなかキネマ」で見て、学習をしてから市内のいろいろなところにある製造から染色、縫製のところまで、見学するというシルクツーリズムを実施しました。知らなかったことが多くあり、地元の人たちも関心を持ちました。ぜひ、みなさんにも地元の資源であるキビソや鶴岡シルクが、どういうふうにつくられるのかということをご覧になっていただきたいと思っております。

そして、今日、会場にいらっしゃる鶴岡中央高校の学生さんたちは「鶴岡シルクガールズ」という活動をやっております。うちも結婚式場をやっているものですから、伊藤羽仁衣さんという有名なデザイナーに鶴岡シルクを素材としたロングドレスをつくっていただき、飾るだけでなくシルクガールズのみなさんにそれを着たファッションショーを開催していただきました。鶴岡中央高校の学生さんには、これからもぜひがんばって続けていただきたいと思っております。

冒頭のご挨拶の中で、日本ファッション協会の坪田専務がおっしゃっていましたが、ファッションが単なる着るものだけではなくて、食も含めていろいろなライフスタイル、いろいろなものに通用するものだとすれば、鶴岡のシルク産業と食文化も本当に密着したものであり、これからも一緒に発展するのではないかと考えています。以上です。

太下 早坂さんのお話の間に「鶴岡シルクガールズ」の映像をいくつか用意したのですが、これもいい映像ですので、ぜひ YouTube を検索していただければと思います。ちなみにこれは経済産業省さんの支援を受けています。

今、大きく地域発クールジャパンという支援を、今後どうしていくかというお話もありました。

次に山田さんからコメントをお願いします。

山田 早坂さんの桑畑からというお話がありましたが、平成 2 年の細川内閣のウルグアイラウンドの時、米だけがべらぼうに目立って守られましたが、それ以外のあらゆる農産物が対象となり、

繭も、それまでは、繭 1 キロが 1600 円から 1800 円くらいしていたわけですが、それがただの 800 円か 900 円かそんな感じになりました。それに松岡製糸で 200 円足して、役場で 100 円足すと 1200 円から 1300 円になるわけですが、その前の高かった時代から見ると、ずいぶんがっかりしました。それまで庄内、鶴岡におきましても 150 戸ぐらいの養蚕農家があったわけですが、細川さんのおかげで、5 戸か 6 戸までに減りました。それまではおじいさんやおばあさんによる養蚕が続いていたわけです。あの時代、べらぼうに値が落ちた結果みなやめてしまったと思っています。

そんなことでこれから養蚕というところから考えてみますと、平成のはじめころというのは田んぼの消毒の粉剤で、自動車が夕方は進めないほど真っ白になっていたわけですが、今は、ヘリで消毒するようになってから、部分的に田んぼだけを消毒するようになり田んぼの近くでも、桑には昔より環境としてはよくなっているところもあるかと思いますが、まずは、桑を栽培するには、昔より条件としては良くなっています。そういう中で桑をつくるのは可能かなと思っています。

それからシルクの消費拡大ということでは、やはり大和さんのようにキビソで“世界制覇”をするということも、これは大事です。最近では松ヶ岡でも嫁にいくというと、タンスもいらなし、着物もいらなし、結婚式といっても貸衣装で間に合わせるようになった。昔は、女の子が生まれたり、親がタンスをつくる木、桐の木を植えたとか、母親が着物をつくってやらなけりゃといった感じで、糸をつむいだり絹を織ったりして、娘に持たせたというような記憶がありますが、やはりそういうこともなくなってしまった。例えば松ヶ岡なら松ヶ岡の機織機械や色を染める染色道具などそういうものを供給して、そこさ行って自分の娘の着物の一反ぐらいは作って嫁に行くとき持たせたりしたもんだな。そういう母親が、また増えることを望みたいと思っています。

これはなしで、そう思うかという、今はずいぶんパンを食べるうちが多くなりまして、山崎製パンの影響だなと思いますが、それでいて、鶴岡市内に小さいパン屋がいっぱいできて、あそこのパンみて、ここのパンみてとそういう小さいところが結構はやっている、売り切れています。そういう発想で、大きいものや大和さんのキビソにはかなわないとは思いますが、やはり自分で草木染めを染めたいから、松ヶ岡に家族で来たといった感じで着物をつくるといった、底辺の絹の消費を進めてみたいものだなと思います。やはり羽二重の消費を増やしていくアイデアを考えていただけないかと思います。

太下 山田さんありがとうございました。大変重要なお指摘をいただきました。生活スタイルの変化の中で、かつてほどシルクが重要でない、そういうことが起きていますね。逆に言うと現在のライフスタイルに合わせた新しい商品開発が非常に重要だというご指摘だと理解をしました。それでは大和さん、お願いします。

大和 西垣さんから、消費者が欲しいものを作り出すというお話があって、もちろんそういうことをしたいのですが、逆に言えば、欲しいものをクラフト的に自分でつくる方が増えていると思います。ただ、キビソに関しては在庫売りをしません。これはブランディングの最中なので、在庫がなければ難しいということもあってやってはいませんが、山田さんがおっしゃるように、クラフトで自分のものをつくっていくとか、ドレスにするのに欲しいとか、こういうことは大事な

ことではないかと思えます。

それからセーレンさんのお話が出ました。セーレンさんは一部上場の大きな会社でございまして、インクジェットが 300 台くらいあります。われわれ中小企業、小規模事業者はなかなか対抗できません。われわれとしては、やはりインクジェットではないものを求めてやっていくことだと思っています。もちろんインクジェットを否定するものではありません。これを作りだすのはなかなか難しいけれども、絹の良さをアピールしていくことで作りだしていきたいなと思えます。新たな需要を喚起したいと思っています。

クールジャパンさんのプラットフォームには、われわれも認定されて選ばれていますが、この間ミラノがあつて終わってから、実はいろいろなところから連絡があります。キビソのホームページには英語のページがありません。この間三越で展示会をやったときも、海外のお客様から直接取引をしたいと言われました。しかしながら、ビジネス英語ができないので、そういう場合にやはり二の足を踏んでしまいます。

まずはプラットフォームでいろいろなところに出させていただきながら、世界にネットでつながっている時代ですので、クールジャパンの支援を受けて、直接商売をしていきたい。そのためには、いろいろなビジネスチャンスを生かして、地元で例えばビジネス英会話ができるような方、英会話の先生というような人たちに起業してもらって、ベンチャー企業としてやっていただくというようなことができたらと思っています。



先ほど「絹の道プロジェクト」の話がございました。これは関東経済産業局のプロジェクトで、実はやられたなと思えました。ぜひ、東北経済産業局でもやってもらえないかと思って話をしていのですが、二番煎じになるのでそれは無理ということの中で、広域連携としてキビソを入れてもらっています。今、第二ステップでは「絹の道プロジェクト」のいろいろな工場の方と、キビソを使った製品の試作をするなど、新しいものづくりを始めました。そういう中で、新たな入口を探っています。同時に出口のいろいろなバイヤーさんやデザイナーさんにもそこで会っています。来週、24日に「グローバルブランド創出研究会」があつて、**matohu**のデザイナーの堀畑裕之さんが講演しますが、前回は佐藤繊維の佐藤正樹社長が講演されていまして。1回目はクールジャパン機構の太田伸之社長がお話されています。そういう試みの中で、関東経済産業局の絹の道というブランディングの中に、キビソも入れてもらって、オールジャパンで海外に出られればと思っています。

「ふるさと名物」というお話も、鶴岡市役所と打ち合わせさせていただいて、だだちゃ豆などの中に、鶴岡シルクも入れていただきたいと思えますし、「鶴岡シルク」の地域団体商標登録を申請しました。「kibiso」は商標登録できたのですが、一緒に申請した「鶴岡シルク」は実はだめだったのです。今、商工会議所さんを通じて地域団体商標登録という形なら登録できるかもしれな

いというお話をいただいているので、やはりブランディングするためには、そういういろいろなものが必要になります。当然、中国などは真似してきますので、そういうものに早く登録しなければいけないと思いますし、地方からやれることもたくさんあると思います。

早坂会頭や市長と一緒にミラノに行って、すごく感動しました。そこでわれわれの通訳してくれたのは、たまたま鶴岡でちゃんこ屋をやっていた方の息子さんでした。僕の高校の後輩ですけども、オンワード樫山さんのミラノ支店長をなさって、自分でブランドを立ち上げられたということでした。彼が一生懸命通訳してくださったし、熱い思いも語ってくれました。そういう人と人のつながりもすごく大事にしてきましたので、今後もいろいろな人とわれわれを結び付けるコーディネーター的な役割、太下さんもそうですけれどもコーディネーターというよりはコンセプターのような形で、いろいろな方と繋がっていきたいと思います。

太下 大和さんありがとうございます。ミラノ万博の反響の大きさを非常に私も感じています。それでは、今井先生、今までのお話を聞かれてひと言コメントをいただければと思います。

今井 2点ほど申しあげたいと思います。まず、山田さんから、山形に富岡製糸場から一等工女を派遣してもらったというお話がございました。一等工女とはどういう形のものかというお話もございましたが、富岡製糸場の場合、当時いろいろな階級がありました。一等工女、二等工女、三等工女となっていました。一等工女が一番上の階級でしたが、当時の製糸は繭の目方で量っていました。一升、二升という量で量っていて、一日に大体五升を超える繭を繰糸できる工女を一等工女と言っていました。そのほか生糸の品質で分けることもあります。一等品、二等品、三等品の中で、一等品のみが輸出用なのですね。あとは国内用でした。当初の、明治5年から明治7年くらいの輸出用の生糸の生産はたった3割程度でした。非常に少ないです。ですからいい製品ができなかったということがわかるわけです。それがつくれる腕の立つ工女を一等工女と言ったわけです。山形に派遣された工女がどういう人だったのかについてはわかりませんが、そういうことが追跡できればおもしろいと思います。

それから2点目、大和さんのお話で、私はきびそを生産する現場を初めて展示で拝見させていただきました。実は、わが国が初めて、きびそ、くず糸ですね、くず糸紡績所というものを作ったのは明治10年で、群馬県の新町紡績所です。これをつくった人はパリ万博に派遣された佐々木淳之介（長淳）という人でした。ヨーロッパでは既にくず糸が利用されていて、佐々木はこれに刺激を受けて、政府の支援を得て新町紡績所を開業したのですけれども、なぜ新町につくったかという、群馬県は生糸の生産が盛んで、ましてや富岡製糸場があった。つまりきびその原料がたくさんあったわけですね。そういうことも含めて、新町につくられたと見ています。実は富岡製糸場のきびそがどこに出荷されたかという、新町紡績所にはあまり出荷されていないのです。出荷先がよくわからない。富岡製糸場のきびそがどういうふうを活用されたか、全く追跡ができていません。現在、山形県の松岡製糸所と並んで富岡製糸場の碓氷製糸工場でも生糸をつくっておりますが、そこで出たくず糸はほとんど販売してしまって、そのあと、どういう形で活用されているかわからない。そこに目をつけたというのは、本当に素晴らしいと思います。ぜひこれを伸ばしていただきたい。

ブランドキャンペーンを展開したということは、差別化ということにもつながるわけですね。

富岡にも地域ブランド協議会というものがありまして、製品は全く違うわけですが、販売の上でそういうものとの連携をどういうふうに立ち上げられるのか、そんなことを考えています。以上です。

太下 世界の富岡からキビソにエールが送られました。それでは、コメンテーターとして登壇していただきました佐々木先生に、今までの議論を聞いていただいた上で、総括的なコメントをいただければと思います。

佐々木 先ほどから一部、二部とずっと伺ってまして、およそこの150年間の歴史のお話だったわけですね。20世紀の約100年間というのは、大量生産、大量消費を競い合った時代です。この中で、残念ながら鶴岡は、必ずしもうまく適応できなかった。だからかなり衰退してしまった。ところが21世紀というのは、大量生産、大量消費のシステムが行き詰っているわけです。逆に言うと、大量消費というのは、非個性的な消費です。みな、同じもの



を着ていたのです。デザインも同じようなものです。ところが、今は違います。個性的文化的消費ですから、隣人と違うものを着たい、違うデザイン、違う色、違う素材のものを着たいのです。だから生産システムも変わってきました。まさにキビソがデザイン化されるわけです。

大量生産の時代には、くずとして見捨てられたものが逆に注目されるようになったし、経済価値だけではなくて、そこに文化的な価値、つまりキビソにふさわしいデザインがマッチするようになり、文化的な価値が加わるので高く売れるようになった。少品種大量生産が多品種少量に、あるいは個性的な生産に変わる時に、例えば食文化も変わるし、ファッションも変わります。

今日のもう一つのテーマはユネスコの話です。富岡製糸場は大量生産のときの産業遺産です。産業遺産というのは、文化財として磨く、つまり文化の力で手を入れていくことで、世界遺産になっていったわけですが、もうひとつ、ユネスコが始めているのが創造都市という事業です。この創造都市というのは、世界の都市を7つのジャンルの文化産業で選ぶもので、鶴岡市は昨年暮れにガストロノミー、食文化都市に選ばれました。これはなぜ選ばれたかという、アル・ケッチャーノの奥田さんというとても前衛的なガストロノミーのシェフが現れて、そのことによって今まで大量生産のマーケットでは見向きもされなかった、少量生産のカブや在来野菜の価値が上がったのです。つまり素材を生かすデザインやアートが入ってくると、食材や素材が蘇る。こういったことをユネスコは創造都市事業として進めています。このネットワークに鶴岡市は加盟できました。そこには、今世界の69の都市（現在は116都市に増加）が加盟してまして、7つのジャンルがありますから、デザインの都市やメディアアートの都市、あるいは映画産業の都市があり、もっともっとクロスオーバーで変形していくと限りなく発展していくことになります。今

鶴岡には、そういうチャンスが目の前にあるのです。

だからシルクならシルクの業界だけで話し合ったり、食文化は食文化の業界だけで話し合ったりするのはだめなのです。多様な産業を創造都市として、総合的に考える。そのためには、たとえばデザイナー・イン・レジデンス、アートフェスティバルなど、もっと文化庁の予算を活用してください。2020 オリンピックに向けて文化庁予算の増額お願いしています。その前に経産省に生活文化創造産業課をつくってもらいました。「生活文化創造（クリエイティブ）産業課」というのは、実はわたしがネーミングに協力したのですが、次の段階では、経産省という名前も変えたいと思っています。例えば「創造経済省」などです。クリエイティブエコノミーの時代だから、創造経産省に変わって、多様な文化産業を発展させるようにしていければ、鶴岡はもっとよくなります。それが一部、二部を聞いた感想です。どうもありがとうございました。

太下 佐々木先生、総括コメントありがとうございました。進行の私の不手際でだいぶ予定の時間をオーバーしておりまして、本当はパネリストのみなさんにもっとご発言いただきたいのですが、ひと言どうしても発言したくてしょうがないという方はいらっしゃいますか？よろしいですか。それではこれで、シンポジウムを終わりにいたします。どうもご静聴ありがとうございました。





【鶴岡地域会議特別視察会開催概要】

開催日：平成27年11月19日（木）

行程：

視察先	訪問時間	概要
鶴岡まちなか キネマ	9：10～10：15	松文産業旧鶴岡工場のうち昭和初期の建築である木造平屋瓦葺きの工場を生かし、映画館として再生したもの。最新の作品から懐かしの名作まで幅広く上映し、地産地消をコンセプトとしたメニューが楽しめる飲食店を併設。 世界的建築賞「リーフ賞2010」の商業建築部門に入選
羽前絹練株式会社	10：30～11：30	1906(明治39)年、“羽前羽二重精練”と言われた精練加工技術のもとに鶴岡絹織物産地の中核企業として発足。近年、化合織に転換する企業が相次ぐ中、一貫して絹織物を手掛けてきたが、最近はこの伝統技術をベースにした交織・混紡糸織物も広く手掛けている。絹織物の加工における洋装分野では、日本一の加工高と生産量を誇る。 明治創業の工場と昭和15年建築の事務所が、当時のまま保存されている。
アル・ケッチャーノ	11：45～13：00	“食の都庄内”親善大使・奥田政行シェフが、庄内の食材の持ち味を最大限にひきたてる料理を提供するレストラン。奥田シェフはイタリアンという手法で庄内の食材に光を当てた。海から山から川から畑から、毎朝届く庄内の食材が、ソースを使わず素材を生かした料理として提供される。 店名は、「あそこにこんなもの、あったね」という意味の庄内弁「ある、けっちゃんの～」から。
松ヶ岡開墾場	13：15～14：30	明治維新後、旧藩家老・菅実秀が旧藩士の先行きを考え、養蚕によって日本の近代化を進め、庄内の再建を行うべく開墾を行ったのが、松ヶ岡開墾場。明治5年から旧庄内藩士3000人によって開墾され、明治7年に311ヘクタールにおよぶ桑園が完成、明治10年には大蚕室10棟が建設された。そのうち、瓦葺上州島村式三階建の蚕室5棟が現存し、1棟が修復されて松ヶ岡開墾記念館となっている。映画「蝉しぐれ」「おくりびと」などのロケ地となったことから庄内映画村資料館も併設。

視察先	時間・場所等	概要
致道博物館	15 : 00～16 : 00	庄内藩主酒井家の御用屋敷を博物館として公開したもの。国指定重要文化財の旧西田川郡役所や多層民家、旧鶴岡警察庁舎など貴重な歴史的建築物が移築されている。珍しい書院づくりの庭園「酒井氏庭園」も。

1. 鶴岡まちなかキネマ

日時：2015年11月19日（木） 9：10～10：15

場所：鶴岡市山王町13-36

ヒアリング：株式会社まちづくり鶴岡 企画部長 菅 隆氏

見学：まちなかキネマ内の映画館

<概要>

松文産業旧鶴岡工場のうち昭和初期の建築である木造平屋瓦葺きの工場を生かして映画館として再生。内外装ともに木質の材料を最大限利用して温かみのある建築物となっている。最新の作品からなつかしの名作まで幅広く上映し、市民主催のイベント会場としても利用されている。

- ・上映館：計4館（定員：165名、152名、80名、40名）
- ・開館：平成22年5月
- ・ロビーでは鶴岡シルクの展示販売も。

<運営>

株式会社まちづくり鶴岡

- 平成19年、鶴岡市内の32事業所（商工会議所を含む）の出資により設立された完全民間のまちづくりのための会社



2. 羽前絹練株式会社

日時：2015年11月19日（木） 10：30～11：30

場所：鶴岡市新海町21-1

ヒアリング：代表取締役社長 阿部純次氏

常務取締役 佐々木孝氏

取締役工場長 富樫 進氏

見学：同社工場内

<概要>

創業 1906（明治 39）年。100 年余の伝統と歴史を持ち、絹織物の加工における洋装分野では日本一の加工高と生産量をあげている。広幅の精練加工においては、日本で唯一の会社。現在は絹織物の精練だけでなく、交織・混紡糸織物の精練に加え、1914 年に染色部門を新設、絹織物を中心としたさまざまな仕上加工ニーズに応じている。

<精練とは>

生糸からセリシン（タンパク質）その他の不純物を取り除くことを精練という。セリシンを取り除くことによって、シルクは特有の気品ある光沢と滑らかな風合い、絹鳴りなどが生まれる。



3. アル・ケッチャーノ(昼食)

日時：2015年11月19日(木) 11:45~13:00

場所：鶴岡市下山添一里塚 83

<概要>

ミラノ万博にも派遣された“食の都庄内”親善大使・奥田政行シェフが、在来作物など庄内の食材の持ち味を最大限にひきたてる料理を提供するレストラン。



4. 松ヶ岡開墾場

日時：2015年11月19日（木） 13：15～14：30

場所：鶴岡市羽黒町松ヶ岡

ご案内：松ヶ岡産業 清野氏

見学：松ヶ岡本陣、松ヶ岡開墾記念館（旧一番蚕室）

<概要>

明治5年、荘内藩士約3000名が刀を鋤に持ち替え、約311haの荒地を切り拓き、桑園を造成し、養蚕のための木造の大蚕室を建て、開墾した。当初建設された10棟の大蚕室のうち、現在も5棟が現存し、開墾記念館、庄内映画村資料館などに活用されている。

平成元年、中心部の本陣・大蚕室を含む23,950㎡の区域が国指定史跡松ヶ岡開墾場として指定を受ける。

- 松ヶ岡本陣

開墾に際し、参勤交代のおり使われていたお茶屋を藤島下町より移築し、松ヶ岡開墾の総本部として活用したもの。茅葺き、檜造平屋建て。

- 松ヶ岡開墾記念館（旧一番蚕室）

明治8年創建、他の蚕室と同様、棟梁は当時の名匠高橋兼吉ら2名で、養蚕業の先進地上州島村の田島家の蚕室を模し、桁間はその倍にして建造したと言われる。桁間21間（37.8m）、梁間5間（9m）の2階建。屋根には明治8年に取り壊された鶴岡城の瓦が使われている。現在は記念館として、明治の開墾場の記録や養蚕などの貴重な資料と全国の土人形・土鈴が展示されている。



←松ヶ岡本陣↑



↑松ヶ岡開墾記念館（旧一番蚕室）



5. 致道博物館

日時：2015年11月19日（木） 15：00～16：00

場所：鶴岡市家中新町10-18

ご案内：公益財団法人致道博物館代表理事・館長 酒井忠久氏（旧庄内藩主酒井家18代当主）

見学：旧鶴岡警察署（修復工事中）、旧庄内藩主御隠殿、旧渋谷家住宅

<概要>

旧庄内藩主酒井氏によって、地方文化の向上発展に資することを目的に建物および伝来の文化財などが寄附され博物館として保存されている。「致道」は庄内藩校「致道館」に由来。当地は鶴ヶ岡城の三の丸に当たり、庄内藩の御用屋敷地で広大な屋敷が建てられていた。現在は、幕末に建てられた藩主の隠居所である「御隠殿」とよばれる建物の一部が残る。旧鶴岡警察署庁舎（明治17年創建、現在修復工事中）、田麦俣多層民家旧渋谷家住宅（文政5年創建）、旧西田川郡役所（明治14年創建）が移築保存されている。



かつての鶴ヶ岡城内を再現したジオラマ



田麦俣多層民家旧渋谷家住宅



旧西田川郡役所



旧鶴岡警察署庁舎（現在工事中）

“生活文化創造都市推進事業”
鶴岡地域会議 実施報告書

2016年3月発行

編集・発行 一般財団法人 日本ファッション協会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-5-1
神保町須賀ビル7階
TEL 03-3295-1311 FAX 03-3295-3295